嚶鳴館遺草巻第五

「つらつらぶみ」　君の巻

つらつら世の中を被成御覧候所、大概高位貴人には知慮通明徳行優美なる君は稀々にて無位素賤の士には知識人に勝れ、徳行世に被尊候人も不断出候事、御会得難被成候間、愚老所見御聞被成度との御事、篤と承知仕候。

先以高貴の御身分にて、ケ様の所に被付御心候御事、必竟常々御好学御読書の御力と感心仕候。

嚶鳴館遺草巻第五

「よくよく考えた御返事」　君主へあてたもの

よくよく世の中をみてみると、だいたい地位の高い人には、物事について深く考える能力があって、道義にかなったことを行ない、上品で美しい人物がほんとうにまれであって、何の位もなくて身分の低い者に、知識がすぐれて道義にかなったことを行ない、人からも尊敬される人物がいつもいる。どうしてそうなのか。それがよくわからないので、わたくしの考えをお聞きになりたいとのこと、よくわかりました。

まずもって、高い御身分にありながら、こうしたことをお気づきになられましたことは、いつも学問を好み、読書をなされているお力からだと、感心いたしました。

愚老浅学之所見、賢慮に相叶可申哉、無覚束奉存候得共、貴問に随ひ無腹蔵申上候。不敬之文言等は御用捨可被下候。

先づ人と申物は、上は天子王侯の尊貴なるより、下は山野細民の卑賤に至まで、此世に生れ候得ば、其儘教と申ものにて人と成立候事に御座候。

赤子のうちは混々沌々、ほぎやほぎやより外は無之物に候を、父母がいだきかかへ候て、ひだるいかとて乳をふくめ、寒いかとて着せ、あついかとてぬがせ、ねむいかとてすかし、

わたくしのような者の考えが、あなたさまのお考えにかなうものかどうか心もとないことでございますが、ご質問について本心を申し上げます。失礼なこともあろうかと思いますが、どうかお許しくださいますよう。

まず、人というものは、上は天子、王侯といった尊いお方から、下は山野にくらす貧しい者にいたるまで、この世に生まれたなら、そのまま教えによって人になるのでございます。

赤ん坊のときは、すべてがいりまじって何もわかりませんので、ほぎゃあほぎゃあと泣くことしかできません。その子を両親がだきかかえて、お腹がすいていないかと乳を飲ませ、寒くないだろうかと服を着せ、暑いのではないかと脱がせ、ねむいのではないかとあやし、

七夜のうちよりししをやり候得ば能申事を聞、取はづしを不致とて、無理無体にしいしいと教へ、扨目も見え耳も聞え、舌も廻り手足も働き候程に相成候得ば、父母兄第を初め、寄添ひ候程の人が、ぢぢばばととかかと申習はせ、月日を指てはののさまとをがませ、花をうついあかいとをしへ、鳥はとと犬はわんわと申聞せ、にぎにぎとて手を握らせ、あいよあいよとて歩び習はせ、寸時の間も教へ不申といふことなく、是によりて成長いたし、

生まれてまもないときからおむつをかえてやるから、よく言うことをきき、いまだおむつがはずれない時期であっても、むりやりおしっこおしっこと教える。そうして目が見え、耳が聞こえるようになり、ものが言えるようになり、手足も動かせるようになると、おとうさん、おかあさん、おにいさん、おねえさんをはじめ、寄り添う人が、じじ、ばば、とと、かかと教え、お月様やお日様をさして、ののさまとおがませ、花を美しい、赤いと教え、鳥はとと、犬はわんわと言い聞かせて、にぎにぎと言って手を握らせ、あんよあんよと言って歩き習わせ、少しのあいだも教えないということはなく、こうして成長して、

十五六とも申せば最早人中に立交り、身分夫々の付合をも致し、熱い寒い否な応の辞義挨拶も人なみなみのおとなと申ものに相成候。

此段は貴人とても賤民とても、事品は替り候得共、教なくて成立候と申人は無之候。

然處に身賤く生れ候得ば、何弁へもなき幼年の時より、聊もあしきこと有之候得ば父母兄弟抔が目をいからし、歯をかみおどし戒めて、かくするものぞ、さはせぬものぞとて、しかりのしり候故に、幼児の時よりものに遠慮気遣ひと申事を自然と覚え、

十五六歳ともなれば、もう人に交わって、身分それぞれのつきあいをし、おさむいですね、おあついですね、といったあいさつも人なみにするおとなという者になるのでございます。

こうしたことは、身分の高い者、身分の低い者と、立場はかわっていても、教えられずに人となる者はいないのでございます。

そうではありますが、身分の低い家に生まれてきた子は、何とも思わずにおさないときから、少しでも悪いことをすれば、父母や兄弟がにらみつけ、口をいからせてしかりつけ、「こうするのだ」、「こうしてはいかん」としかるから、おさないときから遠慮や気づかいということを自然におぼえ、

苦しきを忍び、大儀なる業もいたし習ひ、人の気をかね目顔を悟り、成長いたし候得ば利発なるも愚鈍なるも、人間相応の勤は致し候事に御座候。

其中に福徳厚く受得て生れ候人は物心覚へ候より、いつとなく手習学問抔に志ざし候て、素読を致し講釈など承り、少々宛合点参るに随ひ、日々月々に面白く相成、夫よりしては人も頼まぬ辛苦心労をも自身と好み候て、なつかしき父母兄弟の手を離れ、他所他国へも罷越、他人の交りをも広く致し、

苦しいことをがまんし、大仕事も習い、人に対して気をつかい、顔つきから察することができるようになり、成長すれば、かしこい子もそうでない子も人なみのつとめができるようになるのでございます。

そうしたなかで、財産や幸せに恵まれて生まれてきた者は、ものごころがつきはじめたときから、いつということなく手習いや学問などをこころざすようになり、素読をして講義などを受けるようになり、すこしずつ理解できるようになるにしたがって、日々に月々におもしろくなる。そうなると、人から頼まれもしないつらく苦しい思いや、あれこれと心配して心を使うことでも、みずからつとめるようになって、そだててくれた父や母や兄弟の手からはなれて、ほかのところや他国へまでも出かけるようになって、人の交際も広くなって、

堪忍用捨をも致し習ひて、飢渇の難儀をも身に受け、人情の厚薄人事の苦楽をも弁へしり、賢智ある人を見れば敬ひ尊び、教導指南を願ひ受て、古今の世の姿、安危存亡の道理まで会得仕り、身に微官寸禄も無之候得共、自然と人にも信用せられ候て、終に名誉の人と相成、素賤のままにて高位貴人の前にも伺候し、治国安民の談にも預り候程に相成候事に御座候。

がまんすること、判断することも習い、飢えとかわきの苦しさをも知って、人情のあついこと、うすいことや、人のすることの苦しいことや楽しいことをもわきまえ知って、賢くて知恵のある人をみれば尊敬して、指導を頼んで、むかしからいまにいたる世の中のこと、安全であること危険であること、存続するか消滅するかということの、ものごとの意味を十分に理解して、自分自身には何の位も、仕官してもらう俸禄（給与）もなくても、自然と人に信用されて、ついには名誉ある人物となって、身分がなくても身分の高い人のまえで、国を治め民を心配させない政治の話にも相談を受けるようになるのでございます。

惣て賤き作業にても稽古修行を不致候て、生れのままにて上手功者に相成候事は、古今無之儀と相見へ申候。古の聖王賢君と申せ共、胎教と申候て、懐妊の内より教を設け、生れ出玉ふ日より賢相輔佐の大臣、忠信篤敬の侍臣、左右前後に立並びて、起居動静教へ戒め諫めただして、下々の父母兄第の如く、しかりののしり打はたきをせぬまでにて、寸分の油断なく教へ育て参らせ候に付、爾の如く聖王賢君にはなり給ひし事に御座候。恐多候得共、東照宮の御幼年より、千辛万苦を被為積候て、天下の主と成給ひし儀は、誰も彼も伝へ承り候事に御座候。

どんな簡単なことでも、練習や修行をせずに、生まれつきのままで、じょうずでたくみな人になることは、むかしからいまにいたるまであったことがございません。むかしの徳のすぐれた君主や賢い君主であっても、胎教といって、妊娠したときから教育され、生まれた日からは賢明な重役や、まごころをもち、うそいつわりがなく、人情に厚くてつつしみ深い家臣がまわりをとりかこんで日常の生活を教え正して、しもじもの父母兄弟のように、しかってたたくようにしてまで、すこしも油断することなく教え育てたから、あなた様のように徳がすぐれた賢い君主になられたのです。恐れ多いことでございますが、東照宮〔徳川家康公〕がおさないときより、つらいことや苦しいことをいろいろ経験されて、天下の主となられたことは、だれでも知っていることでございます。

然故にかくまで目出度御代となり、御子孫御長久に被為栄候御事に御座候。乱世の時を推し考へ候所、只今国主城主の面々、其先祖先祖を承り伝へ候得ば、扨も扨も辛苦艱難なる儀共言語に絶し候事に御座候。

然所、東照宮の御幼年より御辛労を被為尽候御かげを以て、四海太平に一統仕り、弓は袋に包み、太刀刀は鞘に納り、けふよあすよと年積り世移り、最早弐百年の安楽世界に生れ候人は上下共に何の恐れ気遺ひもなく、次第次第に驕奢安逸の風俗に相成、諸侯貴人は腹の内よりの諸侯貴人にて、

ですからこのようなめでたい世の中となって、御子孫も末永く栄えておられるのです。戦国の時代のことを考えてみますに、現在の国主、城主のかたがたは、その先祖、先祖を受け継いでおられるのであって、ほんとにまあ、先祖が苦しみ悩まれたことは、ことばに言いつくせないほどのことでございます。

ところが東照宮がおさないときから苦労されたおかげで、世の中が平和になって、弓は袋にしまい、太刀、刀は鞘におさめ、今日、明日と年がたって世の中が移り変わって、すでに二百年もの平和な時代に生まれた人びとは、上下ともに何も恐れることなく、しだいしだいにぜいたくをして安気にくらすようになって、諸侯や身分の高い人は、こころのそこから諸侯であり身分の高い者となって、

生れ出玉ひたる日より前後左右に立寄候程の人は、唯一筋に機嫌を伺ひ、追従を専に致し、聊発明らしき事も有之候得ば大さうに誉そやし、余程悪敷事有之候てもそれはおしだまり候て、婦人女子の宮仕へ同様に面を和げ声をひそめて、角立ぬを第一の奉公と心得候得ば、人君の作業は冠装束を美敷被召、ものごし立廻り重々敷、下よりは一言の善悪も難申上様にふるまひ給へば、是を威風ある君と称し、おほへい手高にて大儀苦労の言葉をも、むさとかけ玉はぬを尊きことに存じ、

生まれたときからおそば近くにつかえるほどの人が、ただただごきげんをうかがい、こびへつらい、ほんの少しでもかしこそうなことがあれば、おおげさにほめたたえ、とても悪いことをしても、そのことにはだまってしまい、女がつかえるように、にこやかな顔をして声をあらげずに、かどがたたないようにすることがもっとも大事なことだと心得るようになれば、君主の仕事とは、衣服を美しくして、ものごしを重々しくして、下の者がひとことも、ことの良し悪しを言うことができないようにふるまえば、これが威厳があってりっぱな君主であるとほめたたえ、いばって無礼な態度で感謝のことばをかけないことが高貴なことで、

かりにも恭遜謙譲の姿は、おめおめ敷様に恥玉へば、下人臣の行儀もまた衣紋立派に立廻り、閉口低頭して、是非善悪の沙汰は一言も不申上を、君を敬ひ尊ぶと心得候事故に、凡今の人君は生れ出玉へる日より、人の実心実情の取扱ひを受玉ふこと露いささかもなく、虚偽浮薄の介抱にのみ育ち給へば、人情世態安危存亡の道理を悟り玉ふべき便りなく、成長に随ひ驕傲の心のみ募り候て、

かりにもへりくだって譲るというすがたが、おめおめ（恥を感じないで平然）としている態度だと、はずかしく思うようであれば、家臣の行ないもまた衣服だけりっぱにして、だまって答えずただ頭を低くして、正しいことと正しくないこと、善いことと悪いことについてはひとこともいわないことが、君主を敬うことだと心得ますから、たいがい今の君主は生まれたときからほんとうのこころ、ほんとうのことについて教えられることがほんの少しもなく、うそいつわりと、あさはかで軽々しいことだけで育ちますから、人のなさけ、世の中のようす、安全であるか危険であるかということ、引き続くのか滅びてしまうのか、というものごとの正しい筋道を理解する方法がなく、成長するにしたがって、おごりたかぶる気持ちだけがますますはげしくなって、

貴人と申者はよきもあしきも、人はすべて敬ひ尊み、大切に存するものとのみ思ひ玉ふことに成行候こと、是非もなきならはしに御座候。乱世の時は貴きも賤きも人も我も一統に不安心の身の上にて、足軽鑓持の機嫌をさへ大切に心得、たべる物を分て与へ、着る物を脱きせて、人の心を取不申候得ば、まさかの場所にて身の代りにならぬと申道理を存じ、其中にも名将賢主と聞え候程の人は、取分此勘弁万人にも勝れ、我一己切の知恵才覚にては、何事もならぬものと申所を深く会得して、家来眷属と申せば手足の如く大切に存じ、其手足の助を以国郡の主となられ候時は、

身分の高い人というのは、よい人も悪い人もみな敬い大切にするものだと思いこんでしまうことは、どうしようもない習慣でございます。乱世のときは、身分の高い人も身分の低い人もみな不安な身の上ですから、足軽や槍持ちが気に入るように大事にして、食べるものもわけあたえて、着るものにもにも気を使って、その人のこころをとらえておかないと、まさかのときに身代りにならない、といった道理を知っており、そうしたなかで、すぐれた武将、賢明な君主といわれるほどの人は、とりわけてこの考えがすぐれており、自分ひとりだけの考えや能力ではどうしようもないことをよく知っており、家来や一族の者といえば、手足のように大切に思い、その手足の助けによって、国、郡の主となられたときには、

忠義有功の臣には高知貴職をも授け与へ、身にかへて重宝被致候に付、其人々も主人は一身の首よりも大切に致し、手足の力を限り、君の為国の為には身を塵芥とも不存、君に聊も過失ありて、世の謗りをも受玉ふべき時は、命を捨て諫言教訓を尽し、君を明君に仕済し、我は忠臣になり済して、君臣ともに今の世までの手本とは成候事にて御座候。

只今の世は君に君の稽古修行とても無之、高位高官には生れ出玉ひながら、明君賢主と後代称せられ給べき福徳はたへて生れ付玉はぬ衆中も、あまた有之候様に被存候。まづ諸芸術を御覧可被成候。

まごころをつくしてつかえて功績のあった者には、多くの俸禄（給与）と高い身分をあたえて、自分自身よりも大切にするから、その人びとも主人を自分の首より大事にして手足の力のかぎりをつくし、君主のため国のためには、自分を取るに足らないものだと思わずに、君主に少しでもあやまちがあったなら、命をすてていさめ教えて、君主を名君にそだて、自分は忠義をつくす家臣となって、現在にいたるまでお手本となっているのでございます。

いまの世の中は、君主に君主としての稽古や修行をさせることもなく、身分の高い家柄に生まれながら、すぐれた君主と後の世にたたえられる幸福と利徳を生まれつきもっていないかたがたも多くいるように思われます。まずいろいろな人間の活動を見られることであります。

剣術に名有人は、折々人に打たたかれ候人が上手に相成申候。馬術に功者なる人は折々落馬も致し候人が名人に相成申候。一度も打れ不申、一度も落不申稽古修行もなくて、直に達人に相成候人は無之候。人君も幼年よりしばしば諫諍の臣に仕こめられ玉ひて、折々赤面を被成候程の人が、いつにても明君賢将に成玉ふことに御座候。是は今の世斗にては無之、常々御覧被成候通、古今の書籍に記し、聖賢の君と名を残し給へる君は、唯此稽古修行の功を積玉ひし人々にて御座候。

剣術の名人は、そのときそのときに打ちたたかれる人が、じょうずになります。馬術にたくみな人は、そのときそのときに落馬もするような人が名人になります。一回も打たれず、一回も落馬せず、稽古も修行もしないで、すぐに達人になる人はおりません。君主もおさないときから、たびたびあらそってまでも強く目上をいさめる家臣にしこまれて、ときどきはずかしくなって赤面するような人が、いつでも、すぐれた君主、すぐれた将軍になられるのでございます。このことは今の世ばかりではなく、いつも見ておられるとおり、むかしからいまにいたる書物にも書かれており、知識、人格のすぐれた君主として名をのこす君主は、ただこの稽古、修行の成果を積み重ねたかたがたなのでございます。

世話に申候盲蛇におぢずと申ことは、めくらは勇気なるものにてへびを恐ぬと申訳にては無之、我をさす蛇が目に見えぬ故に、をしげなく踏つけて、足をさされ候と申心にて御座候。必竟学問を不致候得は、古今の姿をも不存、何あやぶみ恐れ候気遺ひ用心も弁へ不申、無理無法の気随気儘に相成候て、貴賤ともに浅ましき謗り恥辱を受け、人と生れ候詮も無之、夢現となく一生を過し、草木の枯朽候様に身を終りたる跡は何花香も残り不申、下賤無智のものと同敷、苔の下露と消はて候事に御座候。

世間のはなしで、「目の見えない人は、へびを恐れない」というのは、目の見えない人は勇気があってへびを恐れないからというわけではありません。自分をにらむへびが見えずに、簡単にふみつけてしまい、足に食いつかれてしまうといったことなのでございます。結局、学問をしないと、昔から今にいたるまでの、いろんなこと知らないので、何が危険で用心しなければいけないのかがわからず、道理を無視して、わがままかってにふるまうようになってしまいます。そして、身分の高い人も低い人も、ひどい批難をされて、はずかしめをうけて、人として生まれてきたかいもなく、ぼんやりとしたまま一生を過ごし、草木が枯れてくちてしまったように生涯をおえたのでは、何のあかしも残らず、下品であさはかな者と同じように、すぐに消え去ってしまいます。

前文にも申候通、素賤の身と生れ候得ば、物心存じ候より、人は此身を終り候までは、不道理にては人がゆるし不申、一生が行届かれ不申候付、何卒一生を安楽に人にも人らしくいはれ候半と存候得ば、さまざまの堪忍苦労を致し才不才相応におのれが心力を尽し申事に候得ば、其中より名誉顕達の人も多く出来申候事当然の理に御座候。

貴人と生れ候得ば、右申候通心労苦行も人にさせ、思慮思惟も人にさせ我は我にて一生は済と申所より賢知有徳の君は稀成ものと相見申候。

さきにものべましたように、身分の低い身の上にうまれて、ものごころがついたときより、一生をおわるまで、道理にはずれているようでは、人がゆるさないので、一生をまっとうすることができません。どうにかして一生を苦労をせず、人とつきあい、人らしく生きていこうとするから、がまんして、苦労して、才能と知恵があるなしにかかわらず、みずからが力のかぎりをつくします。そうしたなかから、すぐれた評価を得て、立身出世する人が多く出てくるのも、当然のことでございます。

身分の高い人に生まれたならば、気苦労やつらさに堪えることを他人にさせて、考えることも他人にさせて、自分は自分だけの一生を過ごしていけるということから、賢くて知恵があり、徳行にすぐれた君主がほとんどいないのでございます。

ケ様に申候得ば我は我にて済申候て、辛苦はいらぬものと申様に相聞候得共、人と生れ候て人たるの知恵を天よりうみあたへ玉ひしかひもありて、我が我より思慮思惟も致し候得ば、心は我心にて、一生も我一生にて御座候。其かひもなく人の思慮思惟にて終り候得ば、我心とては無之、永き一生も人の一生同様にて、我身は有て無き物に御座候。

このようにいいますと、自分のことは自分だけで済んでしまい、つらい目にあって苦しむことなどしなくてもいいように聞こえますが、せっかく人と生まれて、智恵を天から生みあたえられた値打ちもあって、自分で自分のことをよく考えれば、心は自分のものとなって、一生も自分の一生となるのでございます。そうした値打ちもなく、他人の考えのままで終わってしまわれるならば、自分の心がなく、長い一生も、他人の一生と同じになってしまい、自分というものがおりながら、ないのと同じことになってしまうのでございます。

是を行尸飛肉とも申、酔生夢死とも申あぢきなき人とは申候。但し夫とてもままにして、大きなる赤子の上下着たる同様に世を過し申候人は、是非善悪の沙汰には及不申候。

君侯などは御果報目出度人君に生れ出玉ひ、又其上に天福万人にも御勝れ、ケ様の道にまで御立入被成候て、かくまでの御切問に及申候事、誠に以重畳目出度御事御座候。

これを、行尸走肉〔歩く死体、走る肉・生きていても無価値な人間〕（原文では、行尸飛肉となっている）とも、酔生夢死〔酒に酔ったような、また夢を見ているような心地で、なすところもなくぼんやりと一生を終わること〕ともいう、つまらない人というのでございます。

ただしそうしたことも、そのままにして、大きなな赤ん坊が着物を着ただけのように過ごしていくような人であれば、正しいことと正しくないこと、善いことと悪いことを教えるまでもございません。

殿様であるあなた様は、よい運を授かって幸福に君主の立場に生まれられ、またそのうえ、天から受ける幸福が多くの人よりもすぐれており、こうした問題まで気づかれて、質問までされましたことは、たいへん喜ばしいことでございます。

弥益人君の稽古修行を御積被成候て、後代までの鑑に被為成候様にと奉存候。愚老が所見とても別段なる義は無御座右申上候事は皆々常々被成御覧候手近き書物に有之候道理に御座候得ば、大略を申述候迄に御座候。誠恐。

○先達て御切問に付愚意申上候所、賢慮に相叶御悦被成候との御事大慶仕候。右に付最早世子にも追々御成長被成候得ば、君侯御一己而已にも無御座、世子へも人君の御修行被付御心度思召候付、右修行の法則如何御心得可被成哉、委敷御聞被成度思召候との御事承知仕候。

ますます君主として努力して学ばれ、後の世まで手本となられますようにと存じあげます。わたくしの意見も、何か特別なことがあるわけではございません。申しあげましたことは、すべて、いつもご覧になっておられる書物に説かれていることでございますので、あらましを申しあげました。心から恐れ入ります。

○さきごろのご質問につきまして、私の考えを申しあげましたところ、お考えにかない、お喜びなされたとのこと、うれしく存じます。このことで、もうお世継ぎのかたが成長されて、ご自身のことだけではなく、お世継ぎにも君主としての修行を心がけたいので、その修行の方法をどのようにしたらよいのか、くわしく聞きたいとのこと、承知いたしました。

先書申上候通、人君の御修行は常々被成御覧候四書五経を初め、凡書物一枚御開き被成候得ば、悉く其事のみにて御座候得ば愚老不申上候共、御自見も可被成儀には御座候得共、貴問に候得ば誰にも能存候事ながら、御答へ申述候。

貴意の通御自己切の御事は不及申上候得共、如何様世子御育ての義は、猶更厚く御心得も被為有度御事奉存候。

先のご返事にも申しあげましたように、君主としての修行は、いつもご覧になっておられる四書五経をはじめ、どのような書物でもいいですから一枚開かれれば、すべてそのとおりのことですので、わたくしなどが意見を申しあげなくても、その書物をお読みいただければよろしいのですが、あなた様からのご質問でございますので、お答え申しあげます。

あなた様のお考えのとおり、あなた様ご自身のことにつきましては申しあげることはございませんが、どうしてもお世継ぎのご養育につきましては、厚い思いがございましょう。

惣てものはまづ、きたひと申事有之候。南蛮鉄も三遍鍛より五遍十篇の鍛は金もよくねれあひ候て太刀刀に致し候ても、きれ味もするどに御座候。天草樫も削立の儘にては弱く、打はりを致し込み候得ば、しなひもよく折れ不申御座候。万物此道理にて人も生れ立より日に晒され風にもまれ、陰陽自然の寒暖に身骨を鍛ひ御座候人は、無病壮健に生立申事に御座候。

あらゆるものには、まずきたえるということがございます。南蛮鉄〔舶来の精錬した鉄〕も、三回きたえたものより、五回、十回と何回もきたえたもののほうが、鉄もよくねれて、太刀、刀にしても、切れ味がするどくなります。〔槍の柄にする〕天草樫も、削りたてのときには、弱くて折れやすいのですが、打ち込みをすれば、よくしなって、折れないようになるのでございます。あらゆるものが、このとおりでして、人も生まれたときから、陽に当たり、風にあたって、陰と陽の自然の寒さと暖かさによって体をきたえた人は、病気にならず健康で元気に育つのでございます。

然に貴人と申物は生れてより此鍛ひをうけ玉ふことなく候故に、気力も自然と薄く、もの に堪へ忍ぶことかよわきものに御座候。されば何事も気折には不参、次第よく取扱ひ不申候得ば成就不致候。仍之まづ習慣を油断致間敷事に御座候。貴賤共に子はとかく親のまねを致し候事、幼年より見慣ひ聞慣ひ候故に御座候。良弓の子は箕を作り、良冶の子は裘を作り慣ひ候事自然に御座候。

しかしながら、身分の高い人というのは、生まれてからずっと、きたえられることがないので、気力も自然とうすく、ものごとに耐え忍ぶことに弱いものでございます。ですから、なにごとにも短気なことではなりませんので、その取り扱いをうまくしないと、成し遂げることはできません。このため、まず習慣に、たかをくくって気を許さないことでございます。身分の高い者の子も身分の低い者の子も、こどもはとにかく親のまねをして、おさないときから見て習い、聞いて習うものだからでございます。よい弓作りの子が、父に習ってやわらかい柳の枝を集めて箕をつくることを学び、よい鍛冶屋の子が、父のすることを見習って、けものの皮をつなぎ合せて皮衣を作る〔父祖の遺業を継ぐという意味〕のは、あたりまえのことでございます。

然ば子共に善業を為致度存候得ば、まづ親が善業を致し候て見せ申候事当然の理に御座候。

まして御子達に賢君の稽古修行を御仕入被成度思召候はば、まづ御自己に御勤可被成事不及申上候。乍併いつも申上候通、下々の子共は幼年より親の取扱ひも無造作にて彼鍛ひ丈夫にて熱い寒い退屈大儀もいやを不為申仕入候得ば、都ての作業も次第に苦労難儀とも不存勤習ひ候得ば何事も面白み早く付申候て、さのみせがみ立不申候得共見るを見まね聞を聞まねに、いつとなく上手名人に相成申候。

だから、こどもに善いことをさせようとするならば、まず親が善いことをして見せるのがあたりまえのことでございます。

なおさらお子たちに賢明な君主になるように修行させたと思われるなら、まずご自身がそれに勤められることは、いうまでもありません。しかしいつもお話しておりますように、下々のこどもは、おさないときから親の育て方も無造作で、きたえかたもしっかりしており、暑いとか、寒いとか、退屈だとか、難儀なことだとか思わずに勤め習えば、なにごともおもしろくなってきて、それほど責めたてなくても、見よう見まね、聞くを聞きまねで、いつのまにかじょうずになり名人になるものです。

膏粱之性難訓と古より申候て、うまくたべ暖に着て物に気兼気遣ひなく生ひ立玉ふ貴人は、生れ落より前後左右が厭ひいたはり候事を専要に致し候得ば、物事しひて被勤候事は甚難き事に御座候。げに下賤の身分とは違ひ群臣左右に囲繞せられ、万民の上に被立候て、尊き身分に候得ば、下々同様に押つけ押下げて取扱ひ可申訳は勿論無之、機嫌を伺ひ程能取かひ、修行も募候様に可致事には候得共、併此いたはりての心持次第にて以の外の間違ひに相成候事に御座候。

うまいたべものばかりたべているような性質の者を教育するのはむつかしいと古くからいいます。うまいものをたべて、暖かく着て、ものごとに何の気づかいもしないで育った身分の高い者は、生まれたときから、まわりにいる世話係が、面倒をみるので、ものごとをむりにさせようとすることは、とてもむつかしい。身分の低い者とちがって、多くの家臣にとりかこまれて、万民の上に立てられた、尊い身分であるので、下々の者と同じように、押さえつけて押さえつけてさせるようにはできないので、ようすを見つつほどよく取り扱って、修行が積み重なっていくようにするわけですが、しかしこうした取り扱いが、取り返しのつかないまちがいなのでございます。

真実に主人を大切に存じ、行々賢明の主にもなられ候様にと、思ひはまり候侍臣計に候得ば、常々労はりかしづき申候内にも、為に相成候筋を昼夜心得居候事に候得ども、先書にも申候通、当座の機嫌のみを伺ひ、我不首尾致さぬ様にとのみ心得候人計立並び、介抱致し候得ば、児共に飴と申譬の通、虫の出候は不厭、あまい言をのみ進め申候。是を君に鴆毒をすすむる邪佞の臣と申候。此所を弁へられ候が、人君の稽古の最初第一に御座候。

本心から主人を大切だと思い、さきざき賢明な君主になられるようにと考える侍臣ばかりであれば、いつも仕えるなかにも、ためになることを昼夜心がけるでしょう。しかし、先に申しあげたように、その場のきげんだけをうかがって、自分だけは失敗をしないようにと思う者ばかりが、世話をすれば、こどもに甘い物だけをあたえるといったたとえのとおり、害になるようなことでも、あまいことばだけをかける。これを、君主に猛毒をあたえるへつらう家臣といいます。このことをわきまえられることが、君主の練習のまず最初に大切なことでございます。

扨毒はすすめ申間敷と存じ候人は、必当座の機嫌には随ひ不申、苦み計を申物に御座候。苦けれども虫の薬と世話にも申候通、虫の薬はにがきに勝る物は無之候故に、古今の名将賢君と申程の人は、この苦口をきく人を秘蔵致され候て、甘みを申家来を厭ひ嫌はれ候事に御座候。但し人情と申物は、我と我同志の間柄にても、人の気にはさはらぬ甘い言は申よく、機嫌不構に苦口は申悪き物に御座候。

毒をすすめない人は、かならずその場のきげん機嫌をうかがわず、本人のためを思って、言いにくいところまであえて言って、いさめるものです。にがいけれども害虫の薬と、世間でもいうように、害に対する薬は、にがいほどいいのです。むかしからいまにいたるまで、名将、賢君といわれたほどの人は、この本人のためを思い、言いにくいところまであえて言って、いさめる人を、大切にされ、あまいことをいう家臣をきらわれました。ただ、仲間うちにおいても、人の気にさわらないあまいことばは言いやすく、きげんをそこねずにいいにくいことを言うのは、むつかしいことでございます。

まして主君の威は、雷霆よりも恐きものに御座候得ば中々並々の気丈にては歯に絹きせず申事は、至て難成事不及申候。然ば御子達へ賢君の稽古をさせられ度思召候はば先づ此輩を御撰み御附被成候事、最第一の儀と可被思召候。其上にては御修行の被成方御思惟次第、何様にも相調ひ可申事に御座候。已上。

なおさら主君の威厳は、カミナリよりも恐ろしいものですので、なかなか並の気持ちの者では、はっきりと言うことはむつかしい。ですから、お子たちに賢君となる稽古をさせようと思われるならば、まずこうした家臣を選んで、お付けになることです。それがまず第一に大切なこととお考えください。

そうしたうえであれば、御修行のされかたはお考えしだいで、どのようにもなるのでございます。以上。

○人君の側には兎角正直にものを申人を被召使候が第一と兼々被思召候所、愚老御答申候趣と符合致し候付、御安悦被成候との御事大慶仕候。乍併是非善悪を明かに致弁別、正直に申述候程の人に、御事を被見候との御事、御尤に承知仕候。如何さま何方にても御家来は数多に御座候ても、右の筋を聢と弁へ君を諫言など仕候程の人は、沢山には無之物に御座候。

○君主のそばには、とにかく正直にものを申す者を召し使うことがもっとも大事だとお考えであるとのことにつきまして、わたくしの考えもそのようであったことに安心なされたとのことで、よろこんでおります。それで、正しいことと正しくないこと、善いことと悪いことを、はっきりと正直に言う者を、（若君に）見せられたいとのこと、もっともなことです。じっさい、どの国でも家来はおおぜいいますが、これまで述べてきたような、筋をきちんとわきまえて、君主に忠告できるような者は、それほどいないものでございます。

誰とても主を持候人は、我君あしかれと存候人は一人も無之候得共、心に弁へ覚え候力無之候得ば、申上度儀も可申述様も不存、むさと口出しも難致、心中には不快に存候得共、おしだまり候て、其日其日を過し申候事げに余儀もなき事に御座候。されば なきぞとて被捨置候道理も無之候得ば、そろそろ申ものの出来候様に被懸御心度儀と奉存候。

だれでも主人を持つ人は、その君主が悪い人であるようにと思う人は、ひとりもおりませんが、きちんと心に命じてわきまえている力がないと、言うべきことも言わず、軽はずみに口出しもできず、こころのなかでは不愉快なことだと思っていても、ひたすらだまって、その日その日を過ごすようなことで、まったくほかにとる方法もありません。そうしたときは、ほかに方法がないとほかっておくしかないということでもありませんので、ぼつぼつとでも、ものを言う者が出てくるように心がけていただきたいことと存じあげます。

是非善悪を弁へ申候人の出来候様にと申候手段は、人に道理を知せ申事に御座候。人に道理を知せ申候手段は、学問を為致候事に御座候。学問を為致候は、まづ大学の道はと読み習はせ申事に御座候。よみ覚え候得ば、其訳を存度相成候事人心の常に御座候。一つ承り二つ承り、数をかさね申候得ば、物事のしれて参り候事人心の霊妙なる所に御座候。心に知れば口にも申され、身にも被行候事も、又自然に御座候。

正しいことと正しくないこと、善いことと悪いことをわきまえた人がでてくるようにする方法は、人に道理（ものごとのすじみち）を知らせることです。人に道理を知らせる方法は、学問をさせることです。学問をさせることとは、まず「大学の道は」と読み習わせることです。読みおぼえれば、そのわけを知りたくなるのが、人の心のいつもかわらないところです。ひとつ聞き、ふたつ聞きしてかずをかさねていくと、ものごとを理解することができるようになるのが、人の心の奥深くすぐれているところです。心でわかれば、口に出して言うこともできるようになり、実行することもできるようになるのが自然なことなのでございます。

世話にも申候通、習はぬ経は読れぬと申事は、聖賢の上にても同様に御座候。世に物知りと申人も、習はぬむかしは素人にて御座候。然故に御覧被成候通、古より聖王賢君の天下国家を治め給ふ道も、まづ人を人に教へたて候が、治道の手初に御座候。人に善悪を弁へさせず、善をせよ悪をするなと申事は天子の御威勢にても不参儀に御座候。御家中の輩も学ぶと申事、よきことと申訳を存候はば、誰かひとり不学のものは有之間敷候。

世間でも言っておりますように、「習わぬお経は、読めません」というのは、聖人でも賢人でもおなじです。世間で物知りといわれる人も、教わったことを繰り返し練習して身につける前は、何も知らない人だったのです。ですから、ご存じのように、むかしから徳のすぐれた君主、賢明な君主が、天下、国家を治める道筋も、まず人を人に教えることが、国を治めることのはじめでした。人に善いことと悪いことをわきまえさせずに、善いことをしなさい、悪いことをしてはいけませんということは、いくら君主の人を恐れ従わせる力であっても、できないことです。家中の者も、学ぶことはよいことだと思うようになれば、だれも学ばない者はいなくなるでしょう。

愚老弱年の時、人の咄に承り候事有之候。或主人生得学問嫌ひにて、常々被申出候事も不道理のみにて一家中致迷惑候付、家臣共存付候て、兎角少々講談にても被承候はば道理も分り可申と申合、色々とすすめ候て、儒者を招き大学の講釈を初め申候所、一座被承候内いかう退屈にてふさぎ被申候哉、目を舞し被申候付、夫よりいよいよ嫌ひに被相成、講釈と申ものは、人には大毒とてふつふつ聞不被申候付、弥不道理もつのり気儘気随に物ごと被申出候て、兎角家中の迷惑不大形候付、

わたくしが若いときに、人に聞いた話があります。それはある君主が生まれつき学問が嫌いで、いつも言うことが道理にかなっておらず、家中が迷惑しており、家臣どももそれに気づいており、とにかく少しでも講談を聞けば、道理がわかるようになるだろうと、相談して、いろいろとすすめて、儒者を招いて『大学』の講釈をしてもらいはじめたところ、講釈を聞いているうちに、とても退屈をして、ふさぎこむやら、目をまわすやらして、それから講釈がいやになって、「講釈というのは、人には大毒だ」と言って、きっぱりとやめてしまわれた。それで、さらに不道理になって、ままに好き勝手にふるまうようになって、家中の迷惑は一段と大きくなったので、

大臣共又候色々訴訟致し、せめて一座御聞被下候得とて、又或儒者を招き講談を為致候所、初の程は又目を舞し可申かとて甚不安心の容子に御座候所、右の儒者如何様に講じ候哉、殊の外に面白く被存、一向退屈の体もなく候付、家臣共も甚致大悦、まづ短かく申候様にと、側よりささやき候付、能程に講を休め申候得ば、扨扨面白事に候、嘸大儀には可有之候得共、可相成は今一度承度との儀にて、夫よりは常々講日を被待兼被承候付次第に道理も合点参り、後々は余程ほめ候程の主人に被相成候由、

家老どもがまたいろいろとうつたえて、せめて今一度お聞きくださいといって、またある儒者を招いて講談をさせたところ、はじめのころはまた目をまわすかと、とても心配のようすだったが、その儒者がどのように講釈したのか、思いのほかおもしろくおもわれて、ずっと退屈することもなかったので、家臣らもとてもよろこんで、とにかく短く話すようにと、そばからささやいたので、適当に休みながら講釈をすすめたところ、これはこれはおもしろい、たいへんなことだろうが、できれば、もう一度聞きたいとのことで、それからは、講義日を決めて、まちかねて講釈を聞かれるようになり、しだいに道理をわきまえられて、のちには、たいへんほめられるような君主になられたとのこと。

定て初の儒者はこと六ケ敷自分が多年の精学の功を其座きりに向へも、会得為致度、微妙の道理を細かに説たるにて可有之候。然故にうゐうゐ敷被承候耳には何の事に候哉、一向訳も聞え不申候付、退屈も被致候事、断成儀に御座候。

後の儒者は定て功者にて、書面の通誰も彼も会得の相成候筋を大さやかにすらすらと講じ候付、被承候に随ひ、道理も分明に分り、実に実に面白く被存候筈の事に御座候。惣て諸芸共に、しらぬ人が嫌ひに相成候物に御座候。

きっと、最初の儒者はことむつかしく長年にわたる自分の研究成果を、相手にも理解させたいと、こまかい道理まで説いたのでしょう。ですから、はじめてで気持ちが落ち着かない状態で聞かれたので、何のことやらさっぱりわからず、退屈もされたのは、あたりまえのことです。あとからの儒者は、きっとたくみな人で、書いてあることをだれでもがわかるように、はっきりとすらすら話されたから、聞くにしたがって道理もあきらかになり、ほんとうにほんとうにおもしろくなられたのでしょう。どんなことも、知らない人が、嫌いになるものでございます。

茶の湯蹴鞠能囃子にても、しらぬ内は退屈にて、少しも其道を存じ候得ば、面白く相成候事、人情にて御座候。是によって世話にも下手が嫌ひになる、上手が好きになるとも申、嫌ひが下手に成、すきが上手に成共申候。兎角世の中は間違多き物に御座候。我主人は嫌ひと申家来は、まづ家来が嫌ひに御座候。我家来が嫌ひと申主人は、先づ主人が嫌ひ成物にて御座候。嫌ひか好きか、なるかならぬは、致して見不申候ては難決物に御座候。

茶道、蹴鞠、能、囃子でも、知らないときは退屈ですが、少しでもその道のことを知ると、おもしろくなるものです。それが人情というものです。ですから世間でも、下手が嫌いになり、上手が好きになるといい、嫌いが下手になり、好きが上手になるといいます。とにかく世の中は、まちがいが多いものです。自分のつかえる殿様が嫌いだという家来は、まず家来がはじめからいやがっているのです。自分の家来が嫌いだという殿様は、まず殿様がはじめから家来をいやがっているのです。嫌いか好きか、できるかできないかは、してみせないと決められないことでございます。

されば人々の学ぶ心に相成候は、上一人の心持が本に御座候、善悪利害を弁へ、人に利害を能教へ喩し申ものを、一両人も御引立被成候て、御賞翫被成候得ば、誰も御賞翫には預り度、其内には才不才の差別は可有之候得共、其人相応に知恵もひらけ、道理の分り候程には相成候事相違無御座候。但し夫とても差当り御手元に相応の人柄無之候はば他所他国の人にても御注文に叶ひ申候人を御雇ひ可被成御事に御座候。

ですから、人びとが学ぶ心になるのは、君主【上に立つ者】の心持ちがもとになります。善いことと悪いこと、得することと損することをよくわきまえて、人に得することと損することを、よく教えてわからせる者を、ひとりでもふたりでも引き立てて、尊重されれば、だれでも尊重されたいので、才能があるかないかの別はありますが、その人なりに智恵をつけ、道理もわかるようになることはまちがいありません。ただし、そうはいっても、とりあえず手元にそれ相応の者がいなければ、他国の者であっても、自分の希望する条件にあう者がおれば、お雇いになるべきでございます。

雇ふと申事は恥にはならぬ事と相見申候。先大きく申候はば、天地の妙用にても聖徳の天子を御雇ひ被成候て、陰陽造化の功を助けて御もらひ被成候。天子は諸侯を御雇ひ、四海を治め玉ひ国主領主は家老諸役人を御雇ひ、領分の世話をさせられ、侍は鑓持仲間をやとひ、奉公の働を助けてもらひ申候。ちいさく申候はば、人の心の臓は一身の主に候得共、手足を雇ひつかみさすり、あるきはこびも仕候。其手足も大指計にては不参、中指小指の手伝ひを雇ひ不申候得ば、なでさすりも叶ひ不申候。

雇うことは、なんの恥にもなりません。大きくみてみると、天地のひじょうにすぐれた働きも、最もすぐれた知恵を持つ天子を雇うことによって、陰と陽の天地の間の一切の万物を創造することをたすけてもらっています。天子は諸侯を雇って世界を治め、国主、領主は家老や諸役人を雇って領地の世話をさせ、さむらいは槍持や中間（雑務者）を雇って奉公の働きをたすけてもらっているのです。ちいさくみれば、人の心臓は、からだの根本ですが、手足を雇ってつかみ、さすり、歩いているのです。その手足も、おやゆびだけではだめで、なかゆび、こゆびを雇わないと、なでることも、さすることもできません。

申て見候はば、尊き御方程雇ひを多く御入被成候事に御座候。古今高名の武将も、勢を多く雇ひ持玉へる人が大身大家にて御座候。綱、公時、武蔵坊にても、己一人にては一陣の戦は持れ不申候。されば雇ひ候事は美目なることにて、恥辱にはならぬことと被存候。乍恐東照宮は六十余州の大小名を能御雇ひ被遊候故に、如此一統太平を被遊候。

そうしてみると、徳の高い人ほど、多くの人を雇っています。古今の名だたる武将も、他を圧倒する力を持つ者を多く雇っている人が、大家になっています。あの強い武将である渡辺綱（源綱）、坂田金時、武蔵坊弁慶でさえ、自分ひとりだけでは戦をすることはできません。ですから、雇うということは、りっぱなことであって、体面をきずつけるものではないとお考えください。おそれおおいことですが、東照宮（徳川家康）は、六十あまりの国の大名、小名を、うまく雇われたから、いまのように太平の世を築かれたのです。

他山の石以て砥とすべしと申詩の教へは、常々被成御覧候事に御座候。相州物は相州の砥にて硎ず候ては、きれぬと申訳は無之候。扨雇ひと申時は師匠を一人御雇ひ被成候事に御座候。師匠は一人にては百人は教へられぬと申事は無御座候。一人に申聞せ候道理も、百人千人に申聞せ候道理も、道理は同じ道理に御座候。申さば一人も多く集め候て申聞せ候得ば、承り候人も我身の上と計は不存、

「他山の石以て砥とすべし」（【他山の石以て玉を攻むべし】・よその山から出た質の悪い石でも、自分の玉を磨くのに役立てることができる。転じて、他人の誤った言行でも、自分の修養の助けとなるということ）という『詩経』の教えは、いつもご覧になっておられることです。相模で作られた刀剣は、相模の砥石で研がなければ切れないというわけではありません。

さて雇うというときは、師匠をひとり雇うことです。師匠ひとりで百人を教えられないということはありません。ひとりに教える道理も、百人、千人に教える道理も、道理はおなじです。ですから、ひとりでも多くの人を集めて話せば、聞く人も自分のことだけとは思わず、

たとひ身に覚へ候気の毒なる儀有之候ても、恥敷とて顔を赤め申事もなく、心のどかに公に承り候内には、人々己々何となく存当り思廻らし、道理も得と合点の参る物に御座候。主人一人へ指向ひ申候時は、主人計を異見致候様に相聞え、家来へ計申聞せ候得ば、家来計を戒め候様に聞え候物に御座候。君臣一同に承り候得ば、君の心得も有之、家来の心得も有之、上がよければ下の為もよし、下がよければ上の為もよしと申道理分明に弁へしらるることに御座候。

たとえ自分がみじめな思いをして、恥ずかしくなって顔を赤くしたりすることもなく、心安らかに表向きに話を聞くうちには、人びとそれぞれに何となく思い当り、思いをめぐらして、道理もよく理解するものです。君主にのみ講釈するときには、君主のみに意見を述べているように聞こえるし、家来にだけ講釈するときには、家来だけを注意しているように聞こえるものです。君主と家来の一同が、講釈を聞けば、君主としての心得るべきことがあり、家来として心得るべきことがある。上に立つ者に良いことであれば、下の者にとっても良いことであり、下の者が良ければ上の者にとっても良いことであるという道理が、あきらかにわかるのでございます。

併師を尊ぶと申道をまづ心得不申候ては不参事に御座候。古今共に師を尊敬仕候事は、重き道に御座候。申せ聞ふと申様成疎末成ことにては何を承り候ても無益なることに御座候。

依之古先聖王より後世の明君賢王に至るまで、師を尊崇被成候事は常々被成御覧候書面の通に御座候。唐土の昔昔計にても無御座、我朝代々の天子親王の御上にても師臣を尊寵被為在候次第は、物語り等にも書伝へ、殊の外にうやうや敷大事なることに相聞申候。

しかし、師匠を尊敬するということを、まずわからなくてはなりません。古今ともに、師匠を尊敬することは、重要なことです。言ってみよ、聞いてやろうというような、ないがしろにするようなことでは、どんなことを聞いても何の役にもたちません。ですから、古代の徳のすぐれた君主から、後世の賢明な君主にいたるまで、師匠を尊敬されたことは、いつも読んでおられる書物のとおりです。これは、中国の古い話というだけではなく、わが国の代々の天皇におかれても、師としての臣下を尊敬されたことは、物語にも伝えられ、特別にうやまい大事にされたと聞いております。

先此段を急度、御思惟被成候はば、夫よりしては御家臣等御用立候人あまた出来申候て、後々は外より師匠を御雇ひ被成候には及申間敷候。如何様よき田地にても、種を蒔き不申候て、はへ申候苗は無之候。已上。

まずこのことを、よくお考えになられれば、家臣から登用すべき者が、大勢出てくることでしょう。そうすれば、そのあとに師匠を雇うというようなことはしなくてもよくなりましょう。とにかく、良い田畑でも、種をまかなければ、生えてくる苗はありません。以上。

○先書の趣御覧被下候所、兎角御家中によき種を御蒔被成度思召に付、右種に相成候人を御雇ひ可被成思召候得ば、猶又種の美悪撰み方委敷申上候様にとの御事承知仕候。

まづ人の才能は一様には無之、得手不得手有之事に御座候得ば、一人に十善を備候事は、聖人の外には決て無之儀と被存候。

○先にお出ししました手紙の内容を御覧になって、とにかく家中によい種をまきたいとのお考えで、そうした種になる人を雇いたいとのこと。ついては、その種の善し悪しの選び方を詳しく知りたいとのこと、承知しました。

まず、人の才能は、同じではありません。得意なこと、不得意なことがありますので、ひとりに十善がそなわっているのは、聖人しかいないと思います。

注　十善とは、殺生（生きものを殺すこと）・偸盗（ものを盗むこと）・邪婬（よこしまで、節度のないこと）・妄語（うそをつくこと）・綺語（真実に反して言葉を飾りたてること）・両舌（二枚舌をつかうこと）・悪口（人を悪く言うこと）・貪欲（ひじょうに欲が深いこと）・瞋恚（自分の心に逆らうものを怒り恨むこと）・邪見（誤った考え方）の十悪を犯さないこと。

乍併善き種にも被成度思召候はば、大概不具合なることのすくなき人を種に被成度候。不具合と申候は、昔より学問を尊び候事は、学び候へば心もけなげに、道理も明かに、所行も正敷相成候を尊び申事に御座候。然処学び候て、物識には成候得共、志行正しからず、不義不信の沙汰多く世間に聞え候人は、其学問とは喰違ひ候付、是を不具合人と申事に御座候。

しかしながら、良い種にしたいと思われるなら、だいたい不都合なことの少ない人を種にしたいものです。不都合というのは、むかしから学問を尊ぶのは、学べば心がけがよく、しっかりとして、人として行うべき正しい道をわきまえ、行ないも正しくなるからです。それを、学んで物知りになっても、志と行ないが正しくなくて、人として守るべき道にはずれ、誠実でないと世間で言われている人は、学んだことと食い違っているから、こうした人を不都合な人と言うのでございます。

一つ二つをあげて申候はば、孝悌は美徳と申事は乍存、自身の所行は親兄にもしほらしからず、驕傲と申は不徳なることと乍存、我一人ものしりと心得、人を見下し古賢先輩をむさと誹謗し、誠の賢者は、我よき道理も、若や心得違ひにては有之間敷哉と、恐れ気遺ひ候をこそ、謙譲の徳と称し候事なるを、さまで見出したることもなきを珍敷大相に申唱へ、ただ俗人を驚し申事を、自己の手柄と心得候を、古人は学ぶ所にそむきたる人と申候て、不具合の甚敷ひとに御座候。

ひとつふたつ例をあげますと、父母に孝行で、兄によくしたがうことは、道にかなった行ないであるということを知っていながら、自分自身は親、兄に遠慮深くて奥ゆかしくない。他人をあなどり、思い上がった態度をとるのは、人の行うべき道に反することであると知っていながら、自分だけが物知りと思い、人を見下して、昔の賢人、先輩を考えもなく悪く言う。本当の賢者は、自分で良いと思う道理も、まちがえてはいないだろうかと恐れ、気づかうからこそ、へりくだりゆずる、すぐれた品格を持つ人とたたえるのですが、それを大したことでないようなことを、めずらしいことのようにおおげさに言って、ただ普通の人を驚かすことを、自分の手柄と思っている人を、むかしの人は学んだことにそむいていると言って、不都合なことがはなはだしい人でございます。

ケ様なる軽薄の人、種に相成候得ば、見るを見まね、聞を聞まねに、何わる心もなき素人も、なまなかこの学問故にもて余したる人に相成候事、世上に不少候。

種は一粒に候得共みのり候得ば千粒万粒にもはびこり候間、先大事成儀御座候。但し行跡正しければ師匠は夫計にて事済とも難申候。師匠と申時は人の問を待ものに御座候。十の内三つ四つは不弁存候共、残り六つ七つ位は弁へ居不申候ては、人の信仰も生じ不申候得ば、博学多識勿論の事に候。

このような言葉や態度が軽々しくて、思慮の深さや誠実さが感じられない人が、種になったのなら、その人の見まね、聞きまねをして、何の悪い心もない人も、中途半端な学問の影響を受けて、どうしようもない人になってしまう。そうしたことが、世の中に少なくありません。

種は、一粒であっても、実りさえすれば、千粒、万粒にもひろがっていきますので、まずそのことが大事です。ただし、行なってきたことがらが正しいだけでは、師匠とはいえません。師匠とは、人の質問を待つ人です。十のうち三つ、四つはわからなくても、残りの六つ、七つぐらいは知っていなければ、人の信用を得ることはできませんので、ひろく種々の学問に通じていて、知識が多いことは、もちろんのことです。

然し唯博識多才而已にて、躬行の美無之人を用ひ申候時は、貞宗、正宗如何に結構なるわざものとて抜身のままにて腰に指候同様にて、用心と存候内に、いつか自身の怪我を取出し申候、左候得ば先素志素行を失ひ不申人を師長に御用ひ可被成事御座候。素志と申は幼年より存込み候よき志をいつ迄も持通し候事に御座候。素行と申は幼年より平生所行よろしく、壮年に相成候ても、右の善き行をたゆまぬ人を素行ある人と申候て、はえぬきの人間に御座候。

しかしただ、ひろく種々の学問に通じていて、いろいろな才能をもっていることだけで、みずから実行しないような人を採用したときには、貞宗、正宗（ともに有名な刀鍛冶）のような名刀を、抜き身のまま腰にさして、用心をしなければと思っているうちに、自分がけがをしてしまうようなものです。ですから、まず素志素行を失なわない人を先生に採用されることです。素志というのは、おさないときからいだいた良い志を、いつまでも持ちとおすことです。素行というのは、おさないときからふだんの行ないが良く、壮年になっても、その良い行ないをなまけない人を、素行のある人といって、はえぬきの人間というのでございます。

但し少年の時は不都合成所行も有之候得共、成長の上良師良友の助にて、志行を改め有徳の士になり候人も数多有之事御座候得ば、人君広く人才を挙用せられ候日には、右の前過前失を以て被捨候事には無之候得共、なみなみの人情にては、この人にも以前ケ様ケ様杯不都合を数へあげて、善を妨げ候人も多き物に御座候得ば、まづは癖のなき人を師長に立て人を教へさせ申時は、初より信仰もつき、おとなしく教訓を受用致候事定りたる事にて、此段はおしつけにも不参事に御座候。扨又平生躬行正敷と申内にも生れつき窮屈片気なる人は、人の師には難致候。

ただし、少年のときに不都合な行ないがあっても、成長してから良い先生、良い友だちに助けられて、こころざしと行ないをあらためて、徳行のすぐれた人になる人も数多くいますので、君主が広く才能を登用されるときには、以前のあやまちによって切り捨てることはありませんが、普通の人情では、この人に以前、こうした、ああしたあやまちがあったと言い立てて、その良いところをさまたげる人も多いものですので、まずは癖のない人を先生にして、人を教えさせれば、はじめから信用され、おとなしく教えを受けるものですので、このことは、おしつけるものではありません。さて、ふだん、みずからの行ないが正しいといわれても、生まれつき心がせまく、かたよっている人は、人の先生にはできません。

何故と申候得ば、惣て人を取育て申心持は、菊好きの菊を作り候様には致間敷儀にて、百姓の菜大根を作り候様に可致事に御座候。菊好きの菊を作り候は、花形見事に揃ひ候菊斗を咲せ申度、多き枝をもぎとり数多のつぼみをつみすて、のびたる勢ひをちぢめ、我好み通りに咲まじき花は花壇中に一本も立せ不申候。百姓の菜大根を作り候は、一本一株も大切にいたし一畑の中には上出来も有、へぼも有、大小不揃に候ても、夫々に大事に育て候て、よきもわろきも食用に立て申事に御座候。

どうしてかといいますと、すべて、人を育てる心持ちは、菊好きが菊を作るようにするのではなく、百姓が大根をつくるようにしなくてはいけません。菊好きの人は、花のかたちがみごとなものだけを咲かせようと、枝をもぎとり、多くのつぼみを捨ててしまい、伸びる勢いをちぢめて、自分の好みどおりに咲かない花は、花壇に一本もないようにします。百姓の大根作りは、一本、一株も大切にして、畑の中には、上出来のものがあり、へぼもあり、大小が不揃いでも、それぞれを大事に育てて、良いものも悪いものも食べものとして役立てるのでございます。

心持を弁へ可申事に御座候。人才は一様には無之ものにて、一概に我此両様の持方の通りにのみ仕込み可申と存候様なる片気にては、被教候人も堪兼候ものに御座候。知愚才不才夫々相応に取かひ候て、必竟よき人にさへ相成候得ば、何ぞ御用には立ものと申心得無之、識度狭少なる人は師長には難致事に御座候。先ケ様の所御勘考可被成候。蒙仰候種の撰みかたも被成御覧候書物には数多有之候得ば愚意大概を申述候。以上。

この心持ちをわきまえられることでございます。人の才能は、同じものではありませんので、無理に自分の考えどおりに、才能があるかないかといったことだけで、教育しようとする片寄った考え方では、教えられるほうも、堪えられません。知恵のある者、おろかな者、才能のある者、ない者、それぞれにふさわしいように取り扱うことで、結局、善い人にさえなってくれれば、何かお役に立つことだという気持ちがないような、見識のせまい者を、先生にはできません。まずこのようなところを、よく考えられますように。お尋ねのありました種の選び方につきましても、御覧になっておられる書物に、多く説かれておりますので、わたくしの考えのあらましを申しあげました。以上。

○追々得賢慮候付、弥御家中に学問被行不申候ては不叶儀と思召候得ば、可然儒者御雇ひ指南御頼被成度思召候得共、当時学問には種々流義も有之候て、何れか可然御一決難被成候得ば、当時行れ申候程朱学、仁斉流、徂徠流、三流の内是非を致決定候て、申上候様にとの御事承知仕候。乍併愚老式先賢先輩の学術其是非を致裁断申上候などと申儀は中々難及儀御座候。先以一家の学を興し候程の人は何れ共に一世の豪傑にて、各所見有之事に御座候。

○おいおいすぐれた考えを得たので、いよいよ家中に学問が行なわれなければならないと考え、しかるべき儒者を雇って、指導させたいと考えているが、学問にいろいろの流儀があって、どの流儀にすればいいのか決めかねており、いまある程朱学（程顥・程頤と朱熹の学説。宋学）、伊藤仁斎流、荻生徂徠流の三つの流儀のうち、どれがいいのか決めて、知らせてくださいとのこと、承知しました。とはいいましても、わたしのようなものが、むかしの賢人、先輩の学術内容の良し悪しを断定することなど、できません。とにもかくにも、一流派の学問を興すほどの人は、どうみてもその時代の並はずれた人物で、それぞれみるところのあるものでございます。

但し聖人とても無之候得ば、人々是非得失は勿論有之うちの事に御座候。長を用ひ短を捨て申候はば、何れ利益の無之学も有之間敷候。然ば其門流々々にて其師学を推尊致候事、是又尤なる儀に御座候。乍去何流にても未学未熟の人に候得ば、一概に其書のみを読み、其言のみを信じ、広く是非得失を詳考不致、唯其流義の外は惣てひがことの様に申唱へ候事、古今同弊に御座候。

ただし、聖人（儒教で、理想的な人とする堯・舜・禹や殷の湯王、周の文王あるいは孔子などをいう）ではありませんので、それぞれ正しいことと正しくないこと、得ることと失うことは、もちろんあります。長所を受け入れ、短所を捨てれば、なんの利益もないといった学問は、ありません。そうであるならば、その流派、流派によって、その先生と学問を、あがめ尊ぶことは、これまた当然のことです。しかし、どの流派にしても、学問の修め方が不十分で、学問や技術などの経験・修練がまだ十分でない人であれば、すべてその書物のみを読み、その意見だけを信じて、広く正しいことと正しくないこと、得ることと失うことを詳しく考えず、ただ自分の流派以外は、みなまちがっているようにとなえることは、いまもむかしも同じように悪い影響をあたえます。

譬へば僧家の行法も四宗八宗さまざまに品替り候得ども、定て得仏性の外は有之間敷候。儒者の言論も種々に御座候得共、成徳行の外無之様に被存候。必竟其僧の修行次第、仏性をさへ得候はば、何れの浄土へか往生は可致候。

儒者も其人の修行次第、美徳をだに成就致候はば、何れの国家にでも御用には立可申候。左候得ば先其人の徳不徳を御選み被成候て、流義の処はさのみ御撰み無之候ても可然様奉存候。己の流義を偏屈に申唱へ候て、他流を排棄致候は全く其儒者一人切の私心にて御座候。

たとえば、僧侶の修行も、四宗（法相・三論・天台・華厳の四宗）、八宗（倶舎・成実・律・法相・三論・華厳・天台・真言の八宗）では、それぞれちがっておりますが、みな仏の本性を得ることのほかはありません。儒者の思想や見解も、いろいろありますが、徳行を成す以外にはないように思います。つまるところ、その僧の修行しだいであって、仏性を得ることさえできれば、どこかの浄土へ生まれ変わることはできましょう。

儒者も修行しだいで、すぐれた品格さえ成しとげることができれば、どの国ででも役目ができるでしょう。そうであるから、まずその人の徳、不徳を選んで、流派については、それほど考えなくてもよいと思います。自分の流儀を頑固に言い張って、ほかの流儀を捨て去るようなことは、まったくその儒者だけの私心でございます。

人君は万民の主に御座候。何れにても篤学美行の賢者を御用ひ被成候て、一家国の人心を教化有之、一体の風俗を美敷被成候と申が公道なる御所作に御座候。但し先書追々得賢慮候通、偏僻なる人をば師長に御立被成間敷と申義は、彼菊好のきく作り候様には致間敷と申道理にて御座候。

殿様は、すべての人の主でございます。どこにおいても、熱心に学問に励み、おこないのよい賢い人を、用いて、国家の人々の考えや気持ちを、教え導いて、望ましい方向に進ませ、全体の習わしやしきたりを美しくすることが、正しい道の行ないでございます。

ただし、先の手紙におきまして、順に、あなたさまの賢明な考えを得ましたように、心がひねくれている人を、先生にしてはいけない、ということは、菊好きの人が菊を作るようにしてはいけないという道理でございます。

兎角人君の花畑には、牡丹、芍薬、菊、桔梗、紅白黄紫咲交り候て、いつにても生花御入用の時は、御望次第に赤なり共、黄なりとも、其香かうばしく花形見事に開き候を、何十本にても花瓶へ御とらせ可被成事と奉存候。はなぶりが悪きとて、枝も莟もむしり捨候て、我好の黄菊一色と申事は、万民の主の物好には不宜事と奉存候。人の行は善悪唯二通りに御座候、善人多く生じ悪人の減じ候様にと申より外に、教化の本意は無之儀と奉存候。

とにかく、殿様の花畑には、牡丹、芍薬、菊、桔梗、紅色、白色、黄色、紫色の花が咲きまじって、いつでも花が必要なときには、望みしだいに赤色の花でも、黄色の花でも、その香りがよく、みごとに開いた花が、何十本でも花瓶に活けることができるようでないといけません。花ぶりが悪いからといって、枝もつぼみもむしりとって捨ててしまって、自分の好きな黄色の菊だけが咲いているといったようなことでは、すべての人の主としての物好きにはよくありません。人の行ないは、善と悪のふたとおりです。善人が多くなるようにして、悪人が少なくなるようにするしか、教え導いて、望ましい方向に進ませることの本質はないものと存じあげます。

をかしき咄を承り候事有之候。或浄土宗の老師宗徒の内に内々法華を信じ候由を承り甚不決に存じ、染々教誡致し候には、世の諺にも法華仏にならずとこそ申せ、左様に法華を信じ被申候ては、中々極楽往生は不相成事に候と申聞候処其人申候は左様には御示し候得共、此間我等親敷浄土宗の人致病死候て、三日目によみがへり申候。冥途にて地蔵尊の御手引に逢ひ、地獄極楽をことごとく見て帰り申候処、常々念比に致し候法華宗徒の内にも大分往生を致し居候もの有之候由。現在此比の事に御座候。

おかしな話を聞きました。ある浄土宗の老師が、信者のなかに、内々法華経宗を信じている者があることを知って、実に不快に思って、深く心にしみるように、教えさとしたときに、「世間のことわざにも、法華は仏にならず、というではないか。だから、なかなか極楽往生することはできないぞ」といって、話して聞かせたが、その人は、「そのように言われましても、せんだって、親しくしています浄土宗の人が病死しまして、三日目に生き返りました。冥土で地蔵尊の手引きで、地獄、極楽をすべて見てきたが、いつも親しくしていた法華宗の人でも、大勢の人が往生をとげているとのことです。いま現在のことでございます。

然ば一概に法華仏に不成共難申候半と申候時、老師大きに気色を損じ、扨々苦々敷事に候。左様なれば弥陀如来も最早尊とからず候、たとひ如何成大善業の人にも致せ、我祖師源空上人の一枚起請を背き、他宗を念じ候者を、むさと極楽往生を為致、膝元へ引寄られ候事、阿弥陀如来以の外の不都合と存候、左候はば愚僧など最早最早往生極楽を願ひ候念は無之候と申候由、大体世上の儒者も皆此浄土宗老師と一般の見識と被存候。

そうですから、ひとくちに、法華は仏にならないとは言えません」と言った。老師は、たいへん気分を悪くして、「さてさて、ひじょうに不愉快である。そうであるなら、阿弥陀如来も、もう尊くはないのであろう。どのように大きな善行をする人でも、わが宗派を開いた源空上人の一枚起請にそむいて、他宗を信仰する者を、やたらに極楽往生させて、その膝元に引き寄せられていることは、阿弥陀如来がとんでもないことをしている。そうであるなら、愚僧などは、もう、もう、往生極楽を願わない」と言ったという。だいたい、世の中の儒者もみな、この浄土宗の老師と同じようにふるまうと思われます。

注　一枚起請文＝建暦二年（一二一二年）法然（源空）が死の直前に自身で遺言を記し、弟子の勢観房源智に授けたものである。経文には普通、法然上人（又は元祖大師）御遺訓一枚起請文と題されている。

古今の諸賢、世話をやき候は何れみな先聖後聖の教を尊崇致し候為に御座候。たとひ孔孟の本意には違ひ候ても、我流義の祖の遺言には違ひ申間敷と申事は、何共会得難致儀かと被存候。申さば今の世に生れ候人は、一統にむかし生れ候人の弟子にて御座候。

むかしからいまにいたるいろいろな賢人が、世話をやいていることは、どれもみな、むかしの聖人（儒教で、理想的な人とする堯・舜・禹や殷の湯王、周の文王あるいは孔子などをいう）、後の世に出た聖人の教えを、尊びあがめるためです。たとえ、孔子、孟子の本意とはちがっていても、わが流派を開いた人の遺言であるからというのは、なんとも、理解しがたいことです。言えば、今の世に生まれてきた人は、みな、むかしに生まれた人の弟子なのです。

愚老如き生質魯鈍なるものも、幸に幼年より書物を読習ひ秦漢以後の諸書、程子朱子等の遺書も伺ひ、仁斉徂徠杯の見識をもかり候て、其影にこそ寸志の愚見をも申様には相成候事に御座候。

わたしのような、生まれつき愚かで頭の働きが鈍い者でも、幸いなことに、幼いときから書物を読みならって、秦、漢以後のいろいろな書物、程子（中国宋代の兄弟の儒学者、程顥・程頤の尊称）、朱子（朱熹）などの残された書物も見て、伊藤仁斎、荻生徂徠の確かな考えや意見も借りて、そそうしたもののお蔭で、わずかながら、みずからの意見も言うことができるようになったのでございます。

然(しから)は人しれず此(この)恩徳は広大無量なる儀と存候。乍併(しかしながら)うみの親の教へ置く事にても、成長の上にて考へ候得ば、一概に左様にも難成事(なりがたきこと)もたまたま有之(これある)ものに候。とんぼうかみと月代剃(さかやきそ)り候時の差別もなく、親の申置(もうしおき)たる事とて、是非其侭執行ひ候て大間違を仕出し候はば、親の心にては草葉のかげよりも余り悦びは致間敷(いたすまじく)候。必竟(ひっきょう)宗論をつのり候僧は、悟道(ごどう)徹底の師には有之(これあるまじく)間敷候。学脈のみを申つのり徳行の沙汰に及ばざる儒者も難信人(しんじがたき)と被存(ぞんぜられ)候。

ですから、人にはわからないのですが、この恵みは、非常に大きく無限のものなのです。しかし、生みの親の教えでも、成長してから考えてみれば、そのとおりにはいかないことも、ときどきあります。とんぼう髪のときと月代剃り（成人してからの髪形）をしてからのときの区別をせずに、親が言ったことだからと、そのままおこなっては、大間違いをすることもあり、親の心としては、草葉のかげから、あまり喜ばないでしょう。つまるところ、宗論ふりかざす僧は、仏教の真理をさとっていないからです。学派だけを申し立て、徳行のおよばない儒者も、信じることができない人です。

人君の学政を御世話やかれ候主意は、能教へて人民を善に向はせ申事が専務に御座候。程朱学を尊び候人は、徳尊き程朱学師に学ばせ、仁斉徂徠を好き候人はおとなしき仁斉徂徠学者に教へさせ、兎も角も人をよくとりかひ候て、善心になり候様に可被成儀にて御座候。何流にても我執つよく人を得、教化不仕候はば、無益の学問と可被思召候。誰とても昨日孔孟より直に授り受候弟子にても無之候得ば、古賢先輩とても是非得失の無之候ては不叶儀と可被思召候。

殿様が教育について世話をやく本質は、よく教えて人びとを善にむかわせることが、もっとも大切なことでございます。程朱学を尊ぶ人は、徳のある程朱学者について学ばせ、仁斎・徂徠を好きな人は、おとなしい仁斎・徂徠学者に教えさせ、とにかく、人をよく取り扱って、善い心になるようにされることです。どの流派においても、自分中心の考えにとらわれて、それから離れられない人を得て、教化ができないのならば、無益な学問だと思います。誰でも、昨日、孔子、孟子から直接教えを受けた弟子ではないので、むかしの賢者、先輩であっても、正しいことと正しくないことや損得を考えなければ、かないません。

先書申上候通、大体師長は素志素行正敷、片見片気無之、学問も諸書広く見渡し、古今の治乱興亡、人情変態によく通じ、唯人を親切に導き、はなたらしの小童迄も何卒善行善心の人になり立候様にと、実情に取飼ひ候人を先御家中の師に御定可被成候。善意善行を見習ひ聞習ひ候て、夫より追々成立候はば其中よりは一廉の大賢英才も出来可申候。然ば先寛々教化に向ひ候様にと御世話被成度御事と奉存候。己一人ものしりと心得候て、驕傲不恭なる人を師長には必御遠慮可有御座候儀と奉存候。以上。

先の手紙に申しあげましたように、だいたい先生というのは、平素から抱いている志やふだんの行いが正しく、かたよった見方やかたよった気持ちがなく、学問もいろいろな書物を幅広く読んでおり、古今の治乱興亡、人情の移り変わりをよく知っており、ただただ人を親切に導き、はなたらしの子どもでも、どうか善行、善心の人になるようにと、まごころで取り扱う人を、御家中の先生とされることです。善意、善行を見習い、聞き習って、そうしてだんだんと育っていけば、そのなかから、非常にすぐれた賢者や英才も出てくることでしょう。ですから、まずはゆったりと、教化されるようにお世話をされることです。自分だけが物知りだと思っているような、おごりたかぶり、無礼な人を先生には、絶対してはいけないと存じあげます。以上。

細井平洲先生の『嚶鳴館遺草』巻第五

「つらつらぶみ」臣の巻

君侯いまだ御弱年の御事、貴公御忠誠を以、そろそろ御取かひ被成候て、行々名誉の君と仰ぎ候様被成度との御事、乍今更さりとは致感心候。

いつもいつも得御意候通り、一国の治乱万民の憂喜は、只君一人の徳不徳に懸り候事不及申候。

細井平洲先生の『嚶鳴館遺草』巻第五

「よくよく考えた御返事」　家臣へあてたもの

お殿様がまだ若いので、あなたが忠実で正直な心で、ゆっくりとお取り扱いをして、ゆくゆくは名誉のある君主としてあおがれるようにしたいとのこと、あらためてそのようなことに感心いたします。

いつもお考えをお聞かせくださっているように、一国が治まるのか乱れるのか、国民が心配するのか喜ぶのかについては、ただ君主ひとりに、すぐれた品性あるか、ないかにかかっていることは、言うまでもありません。

上一人だによく候はば千事万行何が悪かるべく、上一人の宜しからぬと申時は、千事万行よかるべき道理は古今無之儀、是又不及申候。

大人は君の心の非を格すと有之候。

貴公などの御職分にては何は差置唯君心を御取かひ被成候事、無上の御忠誠莫大の大功にて可有之候。

君主ひとりだけがよければ、あらゆること、あらゆる行ないは、何も悪いことはない。

君主ひとりだけがよくないというときには、あらゆること、あらゆる行ないがよいという道理は、むかしからいまにいたるまでありません。これまた、言うまでもありません。

「徳の高いりっぱな人は、君主の心のまちがいをなおす」と言います。

あなたさまのような役目にあっては、なにをさしおいても、ただ君主の心を、お取り扱いなされることが、このうえもない忠実で正直な心であり、このうえもない大きな功績であります。

今世ケ様の儀に　志　を尽し　候　人は扨々
珍敷　候得ば乍慮外貴公などは稀代の忠臣と
存　候　事に御座　候　。
扨人君の徳は兎角真実心に御自己より善を御
好み、悪を御嫌ひ被成　候　より外は有之間敷。
其真実心に自己より善を好み悪をにくむと申
事は是非邪正の道理を自己の　心　に聢と　弁　へ
不申　候　ては不相成儀、其是非邪　正の　境　を
自己の　心　より　弁　へ　候　道は、学問より外には
無之と御心付　候　との事、最早此上に明智明慮
は有之間敷存　候　。

いまの世の中で、このようなことにこころざしをつくすような人は、たいへんめずらしいことで、失礼ながらあなたさまなどは、世にもまれな忠義をつくす家臣でございます。

さて、君主の徳というのは、とにかくみずからのまごころからよいことを好み、悪いことをきらうようにされるしかありません。そのまごころから、よいことを好み、悪いことをにくむということは、正しいことと正しくないことの道理を、みずからがきちんとわきまえていなければなりません。その正しいことと正しくないことの境を、みずからの心でわきまえる道は、学問しかないと気づいておられるとのこと、それ以上のすぐれた知恵、すぐれた考えはありません。

弥益学問を御進め被成候事、いつ迄も勇猛に御怠慢無之様にと存候。

但し御真実に学問を御好き被成候様にと色々被尽御心候得共、とかく此所御思慮の通難参御心労候被成との御事、御尤至極に致承知候。御深切に御申越の儀、乍慮外愚意の趣無腹蔵得御意候。

先以貴公御志は至極に候得ども、一体の御取計ひ方未御行届無之故かと存候。

さらに学問をすすめられることを、いつまでも勇気をもって何物をも恐れずに行なわれて、おろそかにされないようにと思います。

ただし、本心から学問を好きになられるようにと、いろいろ尽くしても、とにかくそこのところの思いがなかなか通じずに、心をいためておられているとのこと、もっともなことと思います。ご親切にも、わたくしにお聞きくださったことにつきましては、思いもよらぬことですが、わたくしの考えを、かくすことなく腹の底から申しあげます。

まず、あなたさまのこころざしは、もっともなことですが、全体としてのお取り計らいが、まだ行き届いていないからではないかと思います。

先篤と御思惟可被成候。何の業にても初心より面白き事は無之候。まして学問と申は心術の事に候得ば、御弱年の御方御自心初より面白がり可給わけは無之候。

依之古より教学の道はまづ良師を求め良友を選み申事に御座候。

師友、無之候て聖賢の君にひとり成られ候人は無之候。

扨良師良友とても其君愛敬の二つ無之候ては、是又無益の人に候事に御座候。

まずじっくりと、お考えください。どのようなことでも、はじめからおもしろいというものは、ありません。まして、学問というのは、心の持ち方のことでして、年若いかたが、みずからおもしろがることはありません。

ですから、むかしから教育と学問の道は、まずよい先生を求めて、良い友人をえらぶことです。

良い先生、良い友人がいなくて、知識・人格にすぐれた人物にひとりでなられた人はおりません。

その良い先生、良い友人であっても、その君主に、いつくしみ合う気持ちと敬う気持ちのふたつがなければ、何の役にもたたないのでございます。

軽き身分の人は師匠へは常々親敷問答をも致し、朋友とは常々心易く咄合も致し候に付、いつとなく心もとけ候て師匠もむつまじく教訓を致し、朋友も無気遣是非を争ひ候に付、其中に学び候得ば、人も我も何心なく其風に移り、学問おもしろく相成候事に御座候。

貴人と申せばたとひ師範などと名目は尊く聞え候得共、必竟主と家来にて、君には何となく軽侮の心持も有之、臣には元より畏敬の心有之候て、まづまづ十の事は二つ三つならでは申さぬものに御座候。

身分の低い者は、先生といつも親しく問答をして、友だちとも、いつも心安く話し合いもするうちに、いつとはなくうちとける。そうして、先生も親密に教えさとして、友だちも気をつかわずに、正しいかどうかということを議論して、そうしたなかで学べば、相手も自分も同じ心持ちになって、学問することもおもしろくなってくるのでございます。

身分の高い者は、たとえ師範といって名目は尊く聞こえても、結局は主人と家来であって、君主があなどる心持ちもあって、家来にはもとより恐れ敬う心があるので、まず十のことはふたつ三つのことしか言わないものでございます。

まして学問御相手に相成候輩も学問朋立とも難申、唯御伽一通りの心に候得ば、弁へ存じ候事も、先はおしだまり居候て、むさと不申出候。是にて主君の学問と申ものの面白く候相成候筋はいつまでも無之筈に候。

左候得ばまづ学問の面白く御成被成候様に と申時は、此処を能く御勘弁可被成事に存候。されば君の学び給ふ臣は師臣と称し又は賓客賓師など申名目も有之候。惣て学問の御稽古計は常礼常格をはづし師は実の師匠、学友は実の学友と申姿に参り候様に可被成事に御座候。

まして、君主の学問相手になった者も、ともに学ぶといってもなかなかそのようにはならず、ただうわべだけの話になって、知っていることもおしだまって言わずに、うっかりと言いだすこともしない。このようであっては、君主の学問というのもおもしろくはならないのは、いつまでたっても同じです。

ですからまず、学問がおもしろくなるようにするには、このところをよくよくお考えになることです。それには、君主が学ぶ家臣を、師臣といい、または、賓客〔大切な客人〕、賓師〔客分として待遇される師〕などという名目もあります。すべて学問の稽古だけは、いつもの礼儀、いつもの格式をはずして、先生は先生として、学友は本当の学友となさるようにすることでございます。

君臣心を隔て礼法のみに拘り、はるかの末座に手をつき頭をたれ、読かかりよりよみ仕舞まで定りたる文言を講じ、向へ聞えきこへざるの無差別、礼法を失ひ申間敷までにて、一章二章を申済し、其余の事は一言半句も申上ぬ事と申様成姿にては、世にいふ御書院講釈と申物にて、たとひ何年学び給たり共、少しの益も無之、誠に規式一通りの事に御座候。

人を教誨すると申心得は、向の年時相当、身分相当、性質相当を考へ、いづれにも向へ受用のなりやすき様にと申儀専要にて、書面の義理をたがへず教へかたはさまざま有之事に御座候。

君主と家臣の心がはなれて、礼儀だけにこだわって、はるか遠くの末席で手をついて頭をたれて、書物を読み始めたときから読み終わるまで、決まった文句を講義して、むこうの君主に聞こえようが聞こえまいが、礼儀にそむかないことだけを考えて、一章、二章を話し、そのほかのことは少しも言わないといったようなことでは、世間で言う御書院講釈というものであって、たとえ何年学んでも、少しも得るところがなく、決まりどおりのことになってしまうのでございます。

人を教えさとす心得は、年齢、身分、性質を考えて、相手がわかりやすいようにすることが重要で、書かれている道理をまちがえずに教える方法は、いくつでもあるのでございます。

元来御聞被成候方も、いまだ胸中に力とても無之、学問と申物は唯ケ様にていつまでも聞えぬ事を聞て居ることと計御心得被成候得ば、げにげにいつまでも面白くもをかしくも無之事、尤至極成事に御座候。

但し此姿は大臣重職の人能勘弁有之自身よりまづ其座に伺公して、問答応接を致し見せ参らせず候ては、末々の輩にては不相成儀に御座候。

もともと講釈を聞いておられた方でも、まだ心から理解できる力がなくて、学問とはこのように、いつまでも聞こえないことを聞いていることかと思われれば、たしかにいつまでたっても、学問はおもしろくもおかしくもないのは、当然のことでございます。

こうしたなかでは、重職の人が、よく考えて、みずから講釈の場に出て、質問したり受け答えしたりしてみせなければ、下々の者ではそういうことはできないのでございます。

愚老が如き愚鈍なるものも、たまたま諸家の招を請候て、乍無調法師匠の真似を致候処、右之姿にて何れも親み深く申述候に付、いつとなく学問に深く立入被申候て、後々は愚老など及び不申ほどに上達も有之、随ては一家の政事も手厚く、人心悦服致し候程の方々も追々有之候。

愚老など外に知慮も無之候得ば、論より証拠と申諺の通り、唯々兼ていたし覚え候所を得御意候。

扨右の親しみの内には、時としては詩作のあそび文章の楽しみなども有之候。

わたくしのようなおろかな者でも、たまたま諸家の招きによって、行き届かないのですが先生のまねごとをしておりますが、親しみやすいように話しておりますので、いつとはなく、学問に深く興味をもたれて、その後は、わたくしなどが及ばないほど上達されて、国の政治も手厚くなされ、人びとが心から喜んで従われるほどの方々も、だんだんと出てきております。

わたくしなど、とくに深く考える能力もありませんが、「論より証拠〔あれこれ論じるよりも証拠を示すことで物事は明らかになるということ〕」のことわざのとおり、ただただ前からして覚えたことを申し述べました。

さて、こうした楽しみのうちには、ときとして詩作の遊び、文章の楽しみなどもあります。

是又学問の一事に候得ば、夫よりはいつとなく義理は面白きものと申に相成候事自然と被存候。然ば御申越の趣にては、先ケ様の処に被用御心度存候。

あしく致し候得ば学問々々と申名目計にて、いつまでも無面目の素人にて済し被申候衆も不少様に被存候。

必竟取かひ様の不行届故と存候。

但し是は愚老だけの不調法なる了簡に御座候半哉。猶又博識高徳の人へも御相談有之度事に存候。以上。

これもまた、学問のひとつですので、それからはいつということはなく、物事の正しい筋道ということもおもしろく思われるように自然になっていかれます。ですから、お申し出のありましたことにつきましては、まずこのように心を尽くされるようにと思います。

悪くすると、学問という名目だけで、いつまでも根本になるものがない素人として済まされてしまう方も、少なからずおられます。結局、取り扱いが行き届かなかったからだと思います。

ただし、これはわたくしだけの不調法な意見かもしれません。さらにひろく知識があり徳の高い人にも御相談していただければと存じます。以上。

○追々御政事御取扱候て、篤と御勘考被成候所、兎角上下一和不致候ては何事も不参届候得ば、何卒一和致候様にと被尽御心候得共、御思慮の通には難参候に付愚老へ被及御相談候との御事致承知候。成程上下一和不致候て善政成就いたし候事は古今共に相見不申候。

但し是も極意の所は人君と輔相との徳量にかかり候事勿論に候。

○政治を執り行なうにあたっては、よく考えているのですが、とにかく、上下の者が調和していなければ、なにごとも行き届かない。だから、調和するように心を尽くしているのですが、なかなか考えどおりには進まない。そこで、わたくしに相談したいとのこと、よくわかりました。なるほど、上下の者が調和せずに善い政治が行なわれたことは、昔から今にいたるまでありません。

ただしこのことも、本質は君主と君主を輔佐する者の人徳にあることは、言うまでもありません。

乍無調法愚昧だけの了簡つつまず得御意候。先以人交りは貴賤老少知愚の交共に先施と申道有之候。先施とは先づ施すと申儀にて、交接は向をまたず先我方よりしかけしむけ候事に御座候。人より親まれたく存候得ば、先ず我方より親み、人より敬れたく存候得ば先我方より敬ひ、万事人の我によき様にと存候得は、我先人によき様に致候事に御座候。

失礼ながら、わたくしの意見をつつみ隠さず申しあげます。

まず人の交わりというものは、身分の高い者と低い者、老いた者と若い者、かしこい者とおろかな者の交わりにおいても、「先施」という道理があります。先施とは、先ず施すということで、人のつきあいにおいては、相手からではなく、まず自分のほうから働きかけるということです。人と親しくしようと思うのならば、まず自分の方から親しむようにする。人から敬われたく思うのならば、まず自分の方から相手を敬うようにする。なにごとも人から良く思われようとするなら、自分からまず人を良く思うようにすることです。

貴公（きこう）などは重職の事、格禄（かくろくとも）共に御家にて一二の御身分にて候。左候（さそうらえ）得ば貴賤と申時は御身分は貴（き）にて御席より以下は皆賤（せん）にて御座候。貴（き）を以（もって）賤に下り、上（かみ）より下（しも）にくだると申は無上の徳に致し候事は、天地の道も天気下り不申（もうさず）候得ば、地気も上り不申候。天は天、地は地にて陰陽の気交り不申候得ば、万物生育不致（いたさず）候。仍之（これによって）上下の交り調ひ候は、まづ上が初に御座候。

あなた様などは、重役で、格式も禄も家臣の中では一番上かその次の身分です。ですから、その身分は貴く、あなた様より下の者は、みな身分が低い者です。こうした貴い立場から身分の低い者の立場に立ち、上より下にくだるということは、このうえもない徳であり、天地の道理も、天の気が下におりなければ、地の気もあがりません。天は天、地は地だけで陰陽の気が交わらなければ、すべてのものが育ちません。ですから、上下の交わりというのは、まず上の者から働きかけるのがはじめでございます。

たとへて申候はば賤きものが尊き人の前へ出候時貴き方よりまづ是へと申挨拶無之候得ば、賤き方より先それへとては難罷出候。此姿にて御考へ可被成候。

親みも上より下を親み候が初にて、和するも上より下に和するが初にて御座候。惣て人情は賤は貴きに寵せられ、をさなきは年かさに愛せられ、愚なるは知慮ある人に悦ばれ度存候は自然にて御座候。

たとえていえば、身分の低い者が、身分の高い人の前に出たときに、身分の高い人のほうから、まず「こちらへ、どうぞ」と、あいさつがなければ、身分の低い者のほうから、「では」と、動きにくいものです。こうしたことを、考えてみてください。

親しむことも、上の者から下の者に親しむことがはじまりであって、なごむことも、上の者から下の者になごむことがはじまりです。どんなことも、人情というのは、下の者が上の者にかわいがられ、若い者が年長の者に愛され、おろかな者がかしこい人に喜ばれたいと思うのが自然でございます。

然所上は下より親むをまち、老は幼よりなつくを待候て、上より先施なく老より先施なく候得ば、下より親むべき便なく幼よりなつくべき便無之候。然時は上下老幼相互ににらみくらべを致候様にて寄付れ不申候。寄付心のなきは疎遠の初め、疎遠なるは不和のもとにて御座候。惣て人嫌を致し候人は人に嫌はれ候人にて御座候。

それなのに、上の者が下の者から親しんでくることを待ち、老いた者がおさない者からなついてくることを待っていたのでは、上の者からの先施の心がなく、老いた者からおさない者への先施の心がないので、下の者から親しむ手立てがなく、おさない者からなついていく手立てがありません。このようなときには、上の者と下の者、老いた者とおさない者が、おたがいににらみあっているようなことで、寄りつくことができません。寄りつく心がないことから、遠ざかって親しくならず、遠ざかって親しくならないと、仲が悪くなってしまいます。どんなことも、人を嫌う人が、人から嫌われるのでございます。

故に古より賢相良佐と申伝候人には、何れもまづ先施の徳厚く、貴を以賤にくだり、人の心を能取たる人に御座候。さて執政大臣を棟梁の臣と申候事は、上には上屋ねをいただき下には柱戸障子をふまへて、上と下の真中に立たる役人を申事に御座候。

然所当時の人は家老執権と申役に居り候得ば、そのまま主君と同様なる心持に相成、上へ上へと申志は有之候得共、下へ下へと申志は無之、昨日迄は我人申合たる奉公も、今日よりは格別に引離候て、

ですから、古くからすぐれた大臣でよく君主を補佐すると伝えられてきた人は、皆まず先施の徳があって、貴いがゆえに下の者の立場になって、人の心をよくつかみとる人です。さて、家老を棟梁〔大工のかしら〕の家臣というのは、上に屋根があって、その下の柱や戸、障子をきちんと立てて、上と下の真ん中にいる役人のことをいうのです。

それなのに、今の人は家老の役にいるといえば、そのまま君主と同じ心持ちになってしまい、上へ上へという気持ちはあっても、下へ下へという気持ちがなくて、昨日までは、お互いに相談して勤めてきたことも、今日からは特別に引き離してしまって、

物事念頃に不見不聞候を職を守ると心得候故、接遇の道日々月々に高上に相成候得ば、下々我と諧和すべき道はふさがり申事に御座候。

貴公杯は読書も被成候て、右の道理は御弁へ候事に候得ば、一体の和を御志候はばまづ下諸役の人々へ心易く、物事御相談を御しかけ被成度候。相談と申時は貴賤上下の差別なく、人々了簡を申合候て、是非曲直無腹蔵論判いたし候事に候。

ものごとをていねいに見ないこと、聞かないことを、その職務を守ることと思ってしまうので、人のあしらいも、日ごとに月ごとにあたまごなしに威圧するようになってしまい、下の者と仲良くする手立てもなくなってしまうのでございます。

あなた様などは、読書もしておられ、この道理を知っておられるので、全体の調和をお考えになられるのなら、まず下の諸役人の人びとに気軽にものごとを相談されることです。相談されるときには、身分の差別なく、それぞれの意見を出し合って、正しいことと正しくないこと、まがったこととまっすぐなことを、つつみかくさず議論することです。

当世の姿は下より申達候は皆々五寸一尺の書付にものを申させ、家老執政の前へ差出し候て、低頭平伏致し、安否寒温の外は一言も申さず、是非は其指図下知次第に畏り候て退き候を、官長を敬ふとのみ心得候得ば、官長より裁断申渡候て、受は受候得共、実内心に服し候哉否は、官長にても不存事に候。

諺にも一寸の虫にも五分の魂と申候得ば、人々腹中には是と非と有之候事、あながち知者賢者にもかぎらず候。

いまの世のなかのようすは、下からの意見は文書に書いて、家老の前に差し出して、頭をさげてひれ伏して、無事かどうかとか、暑いの寒いのといった時候のことしか言わず、その問題をどうすればいいのかについては、ただ指図と命令だけを受けて引き下がってくることを、上司を敬うことだと思っている。だから、上司の指図を受けはするけれども、それを本心から納得したことなのかどうかが、上司でもわからない。

ことわざにも、「一寸の虫にも五分のたましい〔小さくて弱いものにもそれ相応の意地があるからあなどりがたい〕」と言います。人びとが、正しいことと正しくないことの思いを持っていることは、知恵のある者やすぐれたものだけにあるものではありません。

然故に面従後言の悪風次第に増長致し、影にては各々様々の鬱憤を申合候て、うは向とは相違し、内心にはうそ笑ひ候様なる悪情を引出し候て、終には君の御政事をそぞろ事に致しなし候様にも相成候事に御座候。

愚老以前或侯国へ被招罷越候て、寛々致逗留学政の世話致し候事有之候。其節家老大臣一統に申合候て、一月三度宛政事に預り候程の役方は一席に会合致し、講書など致候て跡にては四方山の事政事の心得にも可相成咄を致し候。

ですから、表面上はしたがったようにして、あとで文句を言うといった悪い風潮が、だんだん広がって、隠れてそれぞれいろいろ心のなかに積もり積もった不満を言い合い、表向きとはちがって、内心ではうそ笑いをするような悪い感情を出させて、しまいには、君主の政治をいいかげんにするようになってしまう。

わたくしは、前にある国に招かれて、長期間滞在して、その国の教育行政に力を尽くしたことがあります。そのときに、家老と重役が申し合わせて、月に三回政治をあずかる役目の者が一堂に集まり、講義をしたことがあります。その講義のあとで、世間のことを、政治の心得にもなるだろうと思ってお話をしました。

其節は老臣銘々酒肴なども相携候て、酒も汲かはし申事に候。但し咄の内には政事の上遠慮なる筋も有之ものに候得ば、給事抔は壱人も近付不申、諸士相互に酌を致し候、時々は上座執政の人もかはるかはる立候て酌をいたし末々役筋へもたべさせ申、ケ様に一堂の上にて底意なくおもひおもひの了簡を申談し、是非邪正の評議を公に致し候に付、いつとなく人心一和いたし、其節の取扱万事模様よく政事も相立候て、主君にも甚満足の事に候ひき。

そのときに、老臣がそれぞれ酒とつまみを持ってきて、みなで酒を飲みかわしました。ただし、話のなかには、政治上秘密にしておくようなこともありましたので、給仕などは加えずに、参加者同士おたがいに酌をして飲みました。ときどきは、上役の重臣がかわるがわる立ってきて、下役の者に酌をして飲ませました。このように一堂に集まって心の底から思い思いの意見を話し合い、正しいことと正しくないことの議論を公表しているので、いつとはなく人の心がひとつになって、諸事の取り扱いがよくなって、政治もきちんと行なわれて、君主もたいへん満足しておられました。

只今など存出し候得ば、扨々珍敷楽敷事を
も見聞いたし置候と、老後の思ひ出に御座候。
とにかくによきことも実々に致し候得ば眼前
の利益有之候。如何程よき事にても規式一通り
にて実々に無之候ては、詮も無之事と被存候。
貴公抔は国の巨室、常々人も尊敬致し候御身分
に候間、真実に御志さへ御立被成候はば上下忠
節一和の風も起り可申候。

いまになって思い出しますと、とてもめずらしいこと
を見たと、老後のよい思い出になっています。
とにかく、良いことも実際に行なえば、眼前の利益を
得ることができます。どれほど良いことであっても、規
則どおりで行なったのでは、甲斐がないではありません
か。あなた様などは、国の重鎮であり、いつも人が尊敬
する御身分ですので、そのこころざしさえ立てられれば、
上下ともに主君への忠義をかたく守ろうとする気持ちが
ひとつになることでしょう。

何れにも一和と申事は御政事の行れ申候 最第一に御座候。忠思を御廻らし被成度事に御座候。必竟和合はならぬものと申言葉は、和合を願はぬ心より申事に候。

人性の善に候得ば、善にむかはぬ人は無之ものに御座候。初申述候通人を嫌ひ候が人に嫌はるる元、人に和せざるは人の和せぬ元に御座候。先々先施を御心懸可被成候。御深切の御相談に任せ彼是不顧慮外無調法の有たけを得御意候。以上。

いずれにしましても、皆がひとつになるということは、政治を行なうにあたって最も大切なことです。まごころをこめてお考えくださいますように。結局、「まじりあうことはいけない」ということばは、まじりあってひとつになることを願わない心からでていることなのです。

人の性質というのは生まれたときから良いものなので、良いほうに向かわない人はおりません。はじめにも申しましたように、人を嫌うことが、人から嫌われるもとです。人と仲よくしないことが、人といっしょにとけ合わないもとです。思いやりのある相談でしたので、心のままを申し述べました。どうぞご理解くださいますように。

以上。

○人君は民の父母と申候得ば、御主君にも先々父母の心持を能御弁へ被成候事、肝要の儀と御心付候て、切角の精力御尽し学術に御向ひ被成候様にと、御取かひ被成候所、兎角時世の俗習にて、主人の学問被致、道理分明に被相成候ては、下々難勤堪兼可申儀、只今迄無之候ても相済候儀を、いらざる御取そだて被成候抔、人々迷惑がり候得ば、是には御こまり被成候との儀御尤に存候。

○君主は、領民の父親であり母親であるといいますので、お殿様においても、まず父親、母親の気持ちをよく知っておくことが、たいせつであるということに気がついて、力をつくして学問をされるようにと、お取り扱いをされてきたが、ややもすると、時代の風潮による世間一般のならわしによって、主人が学問をすると、物事の正しいすじみちをはっきりさせて、下の者が働きにくくなって堪えかねるといったことは、これまでは、何事もなく済んできたことも、余分な取り扱いをすることで、人びとがめいわくがり、これには困ったとのこと、もっともなことだと思います。

是一世おしなべ候俗情、元より浅はか成了簡より申事に候得ば、無是非事に御座候。但し仁智の徳も勇と申徳無之候ては不行事に御座候間、勇猛に御居り御世話被成度事と存候。先能御考可被成候。臣民家国の下に住申候は、てうど人が家の内にすまゐ候様なるものに御座候。

これは、今の時代の全体に広がる世間のありさまであって、もともと思慮のたらない考えから言っていることであって、どうしようもないことです。ただし、仁〔思いやり〕・智〔物事をよく理解する〕といった徳〔すぐれた品性〕も、勇〔心が強く、物事に恐れないこと〕の徳がなくては、実行できませんので、勇気があって何物をも恐れないように、お世話することです。まずこのことを、よくお考えください。国民がその国に住むということは、ちょうど人が家に住むようなことです。

家と申せば誰も彼もよき家には住よく、あしき家には栖うく御座候。扨其家はまづ棟うつばりは上道具、柱かもゐ戸障子唐紙などは中道具、縁敷居ねだつく土台廻りは下道具に御座候。然処如何計上中下の道具材木よろしく候ても、上屋根と申物無之候ては一日も雨露の凌ぎは成不申、仍之上中下の材木はたとひ、ひばひのきけやき抔の上材にても、上やねが雨漏いたし候得ば、三材ともに朽腐り申候。少々柱はゆがみ戸障子は破れ損じ候ても、上やねさへ丈夫に候得ば、人は其家に住居申候。

家といえば、だれもが良い家であれば住みやすく、悪い家では住みにくいものです。それで、その家というのは、まず棟木と梁が上の道具、柱、鴨居、戸、障子、唐紙などが中ほどの道具、縁、敷居、床板、土台が下の道具です。そうしたなかで、どれほど上中下の道具、材木が良くても、屋根がなければ一日でも雨露をしのぐことができません。ですから、上中下の材木が、ひば、ひのき、けやきといった上等なものであっても、屋根が雨漏りすれば、どの材料もくさってしまいます。少しばかり、柱がゆがんで、戸障子が破れていても、屋根さえじょうぶであれば、人はその家に住みます。

然故に上屋根は成たけ丈夫に致度かやぶきよりはよしぶき、よしぶきよりはこけらぶき、こけらぶきよりは瓦ぶき、其瓦も銅瓦に候得ばいつまでも破れもり候心遺ひは無之候。主君は此上屋ねにて御座候。家老用人諸役人諸頭平士は上中下の諸道具にて御座候。如何計上中下の道具よき材木に候ても、上屋根が破れ屋根に候得ば、家を可持様無之候。左候得ば上屋根の丈夫に相成候を嫌ひ申候事、先以余りなる無分別に御座候。

ですから、屋根はできるだけじょうぶにして、かや〔すすきなど・植物〕ぶきよりは、よし〔あし・植物〕ぶきに、よしぶきよりはこけら〔木材の薄板〕ぶきに、こけらぶきよりは瓦ぶきに、その瓦も銅瓦〔木製の屋根瓦に薄く延ばした銅板を張り付けたもの〕であれば、いつまでもやぶれる心配がありません。お殿様は、この家の屋根です。家老、用人、諸役人、諸頭、平士は、上中下の諸道具です。どれほど上中下の道具が良い材木であっても、屋根がやぶれ屋根であれば、家をもつことはできません。ですから、屋根がじょうぶになることを、嫌われることは、あまりにも思慮がなく軽率なことでございます。

国の大小臣おのおの我こそ棟よ梁よ、我こそ床柱よ、きき柱よ抔いかめしく存居候内に、屋根がぼろぼろ破れ損じ候はば、如何可致哉。雨露に朽くさり候より外は有之間敷候。

家国も上壱人の徳明かに仁義の道正敷被執行候はば、下臣民一統に安泰なる事眼前の理に御座候。然るをあかるく成候を嫌ひ候心は、うしろくらき心有之故に御座候。貴公唯今御主君を明君に可被成との御志は、彼上やねを丈夫に被成、下に住候人々安泰にとの御事に候。

国のすべての家臣が、それぞれ、おれこそ棟だ、梁だ、おれこそ床柱だ、きき柱だなどと、いかめしくしていているうちに、屋根がやぶれてしまったら、どのようにするつもりですか。それらも雨露でくさっていくしかないではありませんか。

国家も、お殿様の徳が明らかになって、仁義〔人として守るべき道徳〕の道が正しく行なわれれば、国民すべてが、無事でやすらかになることは、たしかです。なのに、賢明になられることをきらうのは、うしろめたい心があるからです。あなたさまが、いまお殿様を賢明なかたにされようとするこころざしは、家の屋根をじょうぶにして、その下に住む国民が、無事でやすらかに暮らせるようにされることです。

最早弐百年有難き安楽世界に住み申事は、天下の御上屋ねが御丈夫なる御影にて御座候。今国の上屋ねを御修復被成候を厭ひ嫌ひ候人情も、必竟太平安楽の世に生れ、先祖々々の辛労苦行して立置候家の内に何心なく明しくらし候て、風雨露霜の難儀を身に不受人々に御座候。

此人情に御こまり候て学問と申ものを為致、家が倒れ候得ば直に風雨の難を受候道理を弁へさせ、人も我も供勢に此家を持くづさぬ様に申御世話に御座候。

もうすでに二百年も、ありがたい平和な時代に住んでいることは、天下の屋根がじょうぶなおかげです。いま屋根を修理することを嫌う気持ちも、結局、太平安楽の世に生まれて、先祖がつらい苦労をして建てておかれた家で何の苦労もせずに暮らして、風雨をしのぐ難儀をせずにきたからなのでございます。

こうした人情にはこまるので、学問というものをさせて、家が倒れたなら、すぐに風雨をしのぐことができなくなることを教え、みんないっしょに家が倒れないようにお世話することでございます。

扨又むなぎうつばり弱く候得ば、何程よき上屋ねもたるみ、棟梁つよく候ても、柱々が弱く候得ば又ゆがみ、柱々が丈夫に候ても土台廻りが朽候得ば又かたぎ、土台丈夫に候ても地形がしまり不申候得ば終にはくつがへり申候。百姓は国の地形にて御座候。仍之古より地形の百姓を子の如く憐み給ふを仁君と称し、その地形を預りて正敷取扱ふ代官を良吏と称し、柱戸障子の如く所々に立ならびて、自分々々の役儀を大切に勤る人を忠臣と称し、棟梁の如く上をうけもち下のゆるがぬ様に重しになる人を、賢相大臣と称し申事に候。

それからまた、棟木、梁が弱いと、どんなにじょうぶな屋根でもたるんでしまい、棟木、梁が強くても、ほかの柱が弱ければゆがんでしまい、柱が強くても土台回りがくちてしまえばまたかたぎ、土台がじょうぶでも土地がしまっていなければ、しまいには倒れてしまいます。百姓は土地です。ですから、むかしから土地の百姓を、自分の子どものようにいとしく思うお殿様を、仁君〔いつくしみ深い君主〕とたたえ、その土地をあずかって正しく取り扱う代官を、良い役人とたたえ、柱・戸・障子のようにところどころに立ち並んで、それぞれの職務を大切に勤める人を、忠臣〔忠義を尽くす家来〕とたたえ、棟や梁のように上部を受け持って下がゆるがないように重しになる人を賢相〔賢明な大臣〕とたたえたのです。

扨君は上屋根の破れ損じて、下に立物のぬれくさらぬやうにと、心を被用候事に御座候。惣て人は異見教訓を能聞受候得ば、たとひ過失有之候ても、救ひとどめ候事も相成候に付、昔より人君は諫諍の臣を宝に被致候事に御座候。然共諫諍の臣を被用候ば、元来自身の徳明らかなる故に候。一向道理にくらく横紙を破り候人には、致方も無之候。さればこそ昔より諫諍の臣は有ながら、其教に不従家国を滅し候君も数かぎりなく候。

さてお殿様は、屋根がこわれて、その下の物が濡れてくさらないようにと、心を尽くすことです。人はみな、他の人とは違った考えや教訓をよく聞くので、たとえあやまちをおかしても、救うことができますので、むかしから君主は、いさめ言い争う家臣を宝にされたのです。そうした、いさめる家臣を大切にされるのは、もともと君主自身の徳が明らかだからです。まったく道理がわからず、無理を押しとおすような君主では、どうしようもありません。ですから、むかしからせっかくいさめてくれる家臣がいながら、その教えに従わないで、国家を滅ぼしてしまった君主も多くいます。

殷の末にも箕子、微子、王子比干、膠鬲など申候賢知の大臣揃ひ居り候得共、紂王不被用候時は致方もなく、みすみす殷の世は亡び申候。

今人君高貴の身分、自心より是非邪正のかみわけ無之と申時は、下なるものは歯をかみ手をにぎりながら、その無分別に随ひ、破れ屋根の下にてともども朽腐り候より外は無之候。

殷〔中国古代の王朝〕の末期にも、微子〔微子啓は、中国の殷の王族〕、王子比干〔中国殷代の王子。帝辛（紂王）の叔父に当たる〕、膠鬲〔殷の上大夫〕といったすぐれた大臣がそろっていたけれども、紂王から用いられなくなったときには、どうしようもなくなり、わかっていながら殷は滅びてしまったのです。

君主は尊く身分の高いかたで、みずから正しいことと正しくないことがわからないようでは、下々の者は、歯をかみしめ手を握ってがまんをして、その思慮がなく軽率なことにしたがって、こわれた屋根の下で、ともにくちはてていくしかないのです。

然故に自己心より恐れ慎み給はり候様にと申所より、其道理の分る学問を御すすめの事に御座候。然ば人君の明智になられ候は、尽く下たるものの心身安楽なる根元に有之候。是を迷惑に存候人は何共可申様なき至愚の人に御座候得ば、さやうなる人々には御頓着被成まじく候。惣じて善政を存立候時は、賢智の人の服し候様にと申を目当に可致事、至愚の人は此方より夫々に取扱ひ遺し可申事にて、其了簡を用ひ可申筈には無之候。善を挙げ不能を教へ候事、上たる人の心得に御座候。

ですから、お殿様みずからが恐れ慎しまれるところから、その道理のわかる学問を、おすすめになることです。そして、君主としてすぐれた智恵をもたれることが、すべて下々の者にとって、身も心もやすらぐ根本になるのです。それを迷惑だと思う人は、どうしようもないおろかな人であって、そのような人びとは、気にかけないことです。なにごとも良い政治を行なうときには、賢くて智恵のある人がしたがうようにすることを目的とすべきです。おろかな人には、こちらから手をさしのべて取り扱うことであって、その考えを聞くことはありません。良いことをかかげ、良くないことを教えるのが、上に立つ者の心得でございます。

されば まづ主君を明智に致し、明智の風高根より吹おろし、下々愚味の草木は其風になびき随ふやうに被成候得ば、いつの間にか共々に君の明智を悦び有難がるやうに相成ものに御座候。愚老弱年にて長崎に遊学いたし候節、笑止なる儀目前に有之候。

或町人一家内殊の外河豚汁を好きたべ申候。然処に隣家へよき医者家移りを致し、右町家の亭主と念比に相成、彼ふぐ汁を好き申候儀見候て、常々意見を致し候に付、

ですからまず、お殿様をすぐれた知恵をもったかたにして、そのすぐれた知恵を高いところから吹き下ろして、しもじものおろかな草木を、その風になびきしたがわせるようにされれば、いつのまにか、みなお殿様の知恵を喜びありがたがるようになります。わたくしは、若いとき長崎に遊学しましたが、そのときに、ばかばかしいことを目にしました。

ある町人一家が、とてもふぐ汁が好きでした。そうしたところ、となりに良い医者が引っ越してきて、その町屋の亭主と親しくなり、ふぐ汁が好きなのを見て、たびたび「あたることがあるから食べないように」と、注意をしました。

亭主も尤に存じ一家内ふぐ汁を法度に申付候所妻子召使ひ共甚憤り候て、詮なき医者が隣へ参り、主人のふぐ汁をやめさせ候とて彼是と申合、色々讒訴を致し、終に右医者と亭主とを中たがひ為致候。夫より又々ふぐ汁をたべ候事に相成候。或時又々例のふぐを買求め候て、一家内打寄存分にたべ候処、果して毒にあたり、亭主妻子召使共七八人皆々倒れ伏申候。翌朝になり昼までも門戸を不開候付、近隣よりあやしみ気を付見候処、膳椀も其侭にて行燈の前によりこぞり倒れ居、

それで、亭主は、もっともだと思い、ふぐ汁をたべることを禁止しました。ところが、妻子や召使の者どもが、とてもおこって、しかたのない医者がとなりに越してきて、主人にふぐ汁をやめさせたと、いろいろ悪口を言って、しまいにその医者と亭主とを仲たがいさせた。それからまた、ふぐ汁をたべるようになった。あるとき、またふぐを買ってきて、一家全員でたべたところ、思っていたとおりふぐの毒にあたって、亭主、妻子、召使ども七、八人がみなたおれてしまった。翌日になって、昼になっても戸があかないので、近所の人が心配して見に行ったところ、お膳も椀もそのままで、行燈の前で寄り添ってたおれていた。

全くかの河豚の毒にあたり候体に相見候、其内に小でつち一人竈の前に伏し居、是のみ息かよひ候に付、ふぐの毒を解し候には人糞が妙薬と申候て、糞を用ひ候得ば、暫過候て、是は仕合によみがへり申候。其者申聞候は、今日は家内打寄ふぐ汁をたべ申候。私はかねがね隣の御医者の被申候を尤に存じ、たべ不申候所、今日は主人夫婦大きにいかり、主さへたべ候物をおのれ一人たべ不申哉とて叱られ候に付無是非少々、たべのこりはそと隠して捨申候と申聞候由。

まったくふぐの毒にあたったようであった。そのなかに、年若いでっちがひとりかまどの前でたおれており、この子だけが息をしていたので、ふぐの毒を取り除くには、人糞がよく効くというから、糞を飲ませたら、しばらくして幸いにも生き返った。で、そのでっちが言うのには、「きょうは、家内みんなでふぐ汁をたべました。わたしは以前からとなりのお医者さんが言うことを、もっともなことだと思っていましたので、たべなかったところ、きょうは主人夫婦がたいへんおこって、『主人がたべるものを、どうしてお前はたべないのか』としかられたので、しょうがなく少したべて、あとは捨てました」と。

ふぐ汁をとめ申候。医者は身の安全を教へ候人に御座候。然共ふぐ好き共は却て身の安全を悪み嫌ひ申候。扨ふぐ好きどもが身の安全を嫌ひ候とて、我も養生をやめ毒をたべ候は、此小でつちにはおとり候人にて御座候。でつちも心ありて毒を少々給候故、糞は給候得共、命は助り候。とてもの事に全く不給候はば糞もたべまじく候。すべて俗情はをかしき事多きものに御座候。以上。

嚶鳴館遺草巻第五

ふぐ汁をたべることを止めた医者は、からだの安全を教えた人です。でも、ふぐ好きな者どもは、かえってからだの安全のことを考えなかった。それで、ふぐ好きの者どもが、安全のことを考えずにふぐをたべたことは、このでっちよりもおとったことです。でっちもやむをえず少したべてしまったので、糞をたべさせられることになってしまったが、命は助かった。いっそのこと、まったくたべなかったら、糞もたべずにすんだのに。どんなことも、ものを欲しがることは、おかしなことが多いものです。以上。

嚶鳴館遺草巻第五